HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし4 : 宮城県石巻市北上町の浜のいとなみ
Author(s)	平川, 全機; 宮内, 泰介; 髙﨑, 優子 他
Citation	【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし4 : 宮城県石巻市北上町の浜のいとなみ, 1-86
Issue Date	2017-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81649
Type	book
File Information	kitakami4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし　4

宮城県石巻市北上町の浜のいとなみ

北上川河口地域研究グループ編



平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震対策用図（登米）および（大須）を使用して作成。


宮城県石巻市北上町
本書に登場する集落名のみ記載
橋浦地区
追分温泉
石巻市河北
（旧河北町）
北上川
福地
女川
仮設にっこり
サンパーク団地
吉浜
追波
釜谷崎
大須
釜谷
石巻市
米市

目次

遠藤栄吾さん
稼いで、金ためて、船作って。
それが俺の人生の楽しみかた　6

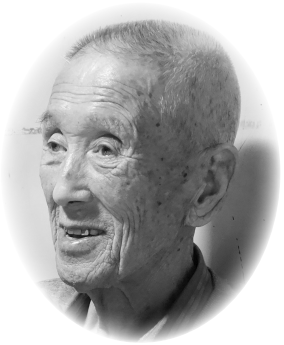
佐藤清吾さん
規制はあるが、そのなかで自由にやる。
そうやって「漁民自治」をつくっていくんです　18

阿部滋さん
海には魅力がなかった。
今は、やり方ひとつで海で暮らせる　32

佐藤喜美夫さん
この仕事は、自分の色を濃く出して、
自分のローテーションでやることなんだね 44
佐藤勝子さん
私らはもう、磯物があれば
じゅうぶんに生きていけました 56
千葉磐夫さん
海を眺めると、スッとする。
地球上でここほど住みやすいところはないんだ 68
あとがき 84

遠藤栄吾（えんどうえいご）さん

稼いで、金ためて、船作って。それが俺の人生の楽しみかた



大正15（1926）年、小滝生まれ。高等小学校中退後、昭和16（1941）年にカムチャッカのサケ定置網漁に出稼ぎ。その後、一時的に牡鹿半島・小竹浜の大謀網に出稼ぎ。戦後は動力船を購入し、小滝で長らく漁船漁業に従事。83歳で漁を引退。平成29（2017）年逝去。

■ 学校へ行く途中で家に帰ったりしました

小学校3年生までは、相川尋常小学校の分校（大指にあった）に通いました。4年生からは、本校のあった相川まで通いました。

相川までの通学は、友だちと声をかけあって、朝早く出ていました。履き物もわら草履でね、雨が降ったりすると時間がかかりましたね。小指の山を越えるときに、本校が見えるんです。遅く行くと、そこでもう朝礼をやっていてね、最初のうちは朝礼をやっていても行ったもんですが、朝礼でみんなの前に立たせられるからと、

家に戻ったりしましたよ。

通学途中でね、蜂の巣に石をぶつけ、蜂が追いかけてくるのから逃げたりしていました。そういうことをやるから余計に学校に遅れるのですね。

■ カムチャッカへ

小学校2年から開口のときには海に出ていましたから、6年生のころには、海の仕事は一人前にできました。親父は心臓が悪く、戦争から帰ってきてから、何もしていませんでした。ですから、海の仕事は、教えられたというより、人のやっているのを見て覚えました。

小学校が終わって高等科（高等小学校）を中途で退学し、昭和16（１９４１）年に北洋に行きました。日露会社によるサケマスの定置網でした。

函館まで汽車で行き、函館で仕込みをして船に乗りました。１２００トンの貨物船に人が貨物になって乗りました。カムチャッカまで、普通だと11日で行くのですが、ちょうど台風に遭って13日かかりました。

行ったのはロシア領の南チェスカです。そこの番屋に寝泊まりしました。漁は、３ヶ月という短い期間でした。その3ヶ月の間、網を建てて、魚をとります。ダンベ船をランチ船（港湾内での連絡や人・荷物の輸送などに使われる、快速で機動性のある舟艇）で引っ張り、ある程度行ったら両側10名ずつでダンベ船を櫂ぎ（ダンベ船には20人くらい乗っていた）、網を起こして、魚を揚げます。ダンベ船は丸い形の船で、前にも後ろにも進むものです。一日に何回も網を起こし、陸との間を往復します。寒いから船の中はストーブをつけていました。

自分はダンベ船に乗っていました。船に乗る役割の人は40人くらいでした。が、運搬する人、船を陸に上げる人、加工の仕事をする人など、１ケ統だけで４００人以上の人がいました。そのうち、工場には３００人以上

いました。一つの定置網ごとに工場があり、塩蔵したり缶詰を作ったりしていたのです。

南チェスカは、そうした定置網がずらっと並んでいましたが、隣の定置網とは5キロくらい離れていました。隣の工場の煙突が向こうの方に見えていました。それがいくつも連なっていました。

寝る時間はわずか2時間しかありませんでした。夜12時になっても明るいのです。それで体調を悪くする人が多かったのです。

■ ひとのやらないことをやりたかった

カムチャッカまで行ったのは、日露会社の人が小滝まで来て募集していたのです。「建網でサケをとる」と聞いて、行くことに決めました。いとこが、カムチャッカじゃないけれど、建網に出稼ぎに行っていて、それを見たうちの親父たちが「募集してくれ」と頼んで募集が始まったのです。そのいとこが募集の仕事をしてました。

俺は当時高等科だったけれど「高等科は卒業しなくてもいい」と言われて、じゃあ行ってみよう、となったのです。漁師にあこがれていたからね。人のやらないことをやりたいという気持ちがありました。いとこ以上のことをやってみたいとも考えました。勉強よりも働きを覚えた方がよいと考えたのです。

ここからカムチャッカへは最初2人行きましたが、そのあとさらに十数人行きました。行ったのはその年1回だけです。4月に行って7月に帰ってきました。

3ヶ月で150円稼ぎました。当時このへんの出稼ぎだと1ヶ月8円でしたから、とてもいい稼ぎでした。お金に惚れたのです。行ってつらいなと思っても、お金のためだと思いました。

賃金は、ここへ帰ってきてから、日露会社が持ってきました。そのお金が財産になりました。それを元手に、人よりも早く動力船を作ったのです。

■ 小竹浜へ「大網稼ぎ」に行きました

その年の8月のお盆に帰ってきて、そのあと志津川（現南三陸町）の寺浜の定置網に出稼ぎに行きました。いとこの家で、戦争で人がいなくて、人手を必要としていたのです。7～8人でやる小さな定置網でした。タラ、イワシ、イカなど雑魚でした。寺浜への出稼ぎはその年だけでした。

そのあと17歳のときに、牡鹿半島の小竹浜の大謀網（大型の定置網の一種）に行きました。阿部きんぞうさんがやっている大謀網でした。イワシ、サバ、雑魚をとっていました。3月から8月のお盆前まで行き、秋は自分の船で漁をしました。

家族の生活費を稼ぐためでした。兄弟が9人いて、自分は長男だったのです。こういう出稼ぎを、ここらへんでは「大網稼ぎ」と言います。小竹浜には2年間行きました。

阿部さんの大謀網では、12～13人くらい雇われていましたね。「番屋」と呼ばれる、寝る部屋がありました。最初の1ヶ月くらいは、沖仕事で、網を入れる段取りをします。そのあと網を入れて、あとは毎日「起こし」（魚を取るために網を上げること）をします。「起こし」は3～4時間で終わり、帰ってきたら、網を作ります。

給料は、ひと月に1回という形もあれば、前借りする人もいれば、「切り上げ勘定」といって最後にもらう形の人もいて、いろいろでした。1か月8円でした。今のお金に直すと15～16万円くらいでしょうか。歩合はほとんどありませんでした。

この小竹浜の大謀網で網の作り方や網の構造を学びました。人のやっているのを盗むように学んだのです。小竹浜の大謀網でとったイワシやサバは、船で渡波（石巻市）の市場にもっていっていました。サバは腐りがはやいので氷を入れてもっていきました。

■ 誰よりも早く動力船を買いました

19歳の時に軍属として徴用され、軍の施設で働きました。木更津空港で滑走路の修理などもしました。そのあと、軍属のまま徴兵検査を横須賀でやって、そのまま入隊です。20歳のとき、青森の大湊（現むつ市）で入隊しました。終戦はそのまま大湊で迎え、昭和20（1945）年9月30日に、ここへ戻ってきました。

戦争から戻ってからは、4馬力の動力船を地元の大工に作らせ、ここで漁業を続けました。小滝の西條きんじろうという大工で、このあとこの人に3艘作ってもらいました。この人は船大工専門で、名人だったね。今小滝でガソリンスタンドをやっている西條さんのおじいさんです。

それ以前は和船でやっていたのですが、牡鹿半島から動力船、昔の「焼き玉」というやつが来ていました。それらが速くて、和船で漕いでいるうちに向こうの船に魚をとられてしまいました。それらに劣らない速い船が欲しいと思ったのです。昭和24（1949）年、「電気着火」で4馬力のものを、4万円で買いました。

親は動力船を買うのに反対しました。「もし水揚げがなかったらどうするんだ」と言われました。しかしこれからは人より目立ったことをやっていかないとダメだ、と俺は考えました。

その後、ディーゼルにしました。ディーゼルは最初は8馬力、次は15馬力と大きくして、最後には75馬力にまでしました。稼いで、金ためて、船を作って。それが俺の人生の楽しみ方です。小滝の港が整備されていなかったので、船が大きくなると志津川の港に停めて、そこまで車で行きました。

■ 鼻鳥がメロウドの群れを教えてくれるのです

春はメロウド、コウナゴ、イサダ（オキアミ）が主なものでした。

イサダはすくい網でした。動力船で行って、エンジンをかけて網を押しながらイサダをすくい、網がいっぱい

になったら揚げて、船に積んで。それを3回も4回もやって船を満杯にします。

メロウドもすくい網です。人のいるところにカモメが寄ってきて、さらに「鼻鳥（はなどり）」も寄ってきます。その「鼻鳥」がメロウドの「イキ」（魚の群れ）を教えてくれるのです。そこに人より早く行くことが大事で、そのためにも馬力の大きい船が必要でした。今メロウドを獲っていないのは、獲る人がいないこともありますが、この鼻鳥が来ないというのもあります。

これらの魚は志津川や女川、あるいは気仙沼の市場に出していました。トランシーバーで各港と連絡をし、値段が高いところへそのまま船で持っていきました。トランシーバーは戦後すぐくらいから使っていました。そのあと簡易無線というのが出ました。

夏は刺し網でスズキやマスをとりました。タラ網もやりました。スケソウダラやマダラをとりましたが、スケソウダラは儲かりました。船が小さいと1貫（3・75キロ）で帰ってこなければならないところ、船が大きいと2貫も3貫もとってくることができました。そうやってだんだん競争になってきました。

先にやった人が勝利するのです。人より先にやることが大事なのです。しかし見込みのないものをやるわけにはいかないので、難しいのです。

ワカメや昆布は、開口で、天然のものをとりました。養殖は、試験的にやってみましたが、シラス（コウナゴの稚魚）漁の時期と重なってしまうので、やめました。漁船漁業はこれまでやってきたことなので先が読めましたが、養殖はどうなるかわからないと考え、漁船漁業の方をとりました。養殖はやらなくてよかった、と今振り返っても思います。

シラスは3月ごろです。ランプ網でした。ランプは、自分が学校に通っていたころはガスで、そのあと灯油になりました。このへんではガスはなかなか手に入らずたき火でしたが。

小型船をやめたのは83歳。開口の磯物採りは85歳までやりました。

■ 磯物は家族全員でとります

磯場のマツモ、テングサ、ツノマタ、ノリ、ヒジキは、開口で採ります。契約講で管理しています。開口後毎日採ってよいかどうかは、ものによっていろいろです。ノリ、フノリ、マツモの場合は、開口後ずっと採ってよいのです。3ヶ月くらいの開口時期です。これは昔も今も同じです。ただ、戦争当時は1～2日で中止しました。というのも、防火訓練とかいろいろなことがあって忙しかったからです。

ツノマタは、一回採ってしまうと、来年までおがらない（生えない）。だから、ツノマタは、2～3日採ると終わりでした。ツノマタはとらなくなってもう30～40年になりますねえ。ヒジキはお正月に開口。1回の開口で終わりです。

磯物がおがっている場所は、一定しないんです。範囲が広くて。フノリは浜の方にあり、ノリは荒崎（小滝集落の中の地名）にもあります。ヒジキやツノマタは全般的にあり、ノリ、フノリはヒジキより上にあります。道具は使わないで、手で採ります。

採りにいくのは男女問わずみんなで行きます。開口のときしか採れないから、家族全員で出ます。子供も出ます。お祭りだね。

■ 磯物は我々の「田」

「築磯（つきいそ）工事」って言ってね、酸性化で白くなった岩を海岸からとって、海岸の岩をとり、浜に入れるという工事をやったこともあります。磯物が繁殖するようにね。補助事業でやりました。戦後まもなく昭和30（1955）

年ごろまでやりましたね。

フノリは、繁殖時期に採ったやつを、今の養殖ワカメの種付けと同じように、水で洗ってその水をじょうろで岩にかけるんですよ。そうすると、すぐ密着してしまいます。流れないのです。

昔は、よそから磯物を盗みに来る人がいるので、契約講で順番に監視員を付けました。今は付けていません。昔はそれで飯を食っていたもんだからね。磯物は我々の「田」だから。

ただし、双子島（ふたごじま）の磯場は契約講で管理しません。双子島は磯場が大きく、船で行ってたくさんの時間働いて帰ってきます。他の集落からも自由です。大指からでも小指からでも来る。相川からもたまに来る。自由にしても採りすぎになる心配はないんです。潮が引いたときに採る、潮が上がると帰ってくる。磯物というのは、採っても少し残っている。それが次の潮のとき、つまり一週間くらい経って戻ってくると、また生えています。

フノリなんかは、採らないと、余計な草がつく。「ノラ」というノリみたいな草がついて、食用に適さなくなります。だから採った方がきれいなのがおがってくるのです。

磯物は、行商に行って米と交換しました。女性の仕事でした。人によって持って行くところは違いますが、豊里（とよさと）、登米（とめ）、中津山、神取（かんどり）、涌谷（わくや）、小牛田（こごた）などへ行商に行きました。2～3日で売って帰ってきます。

採ったその日に加工して、次の日に行商に出かけます。だから夜も昼もなかったのです。

イワシの煮干しなども行商していました。イワシが市場に出せないくらい少ない時は、ここで揚げて、煮て干しました。コウナゴの小さいのも、うちで加工しました。

■ アワビの開口のときは女も船に乗ります

アワビはよく採れましたね。今は3センチ以下は採るなと言うけれど、昔は全部採ったんですよ。それでも、

次の年はちゃんとあるのです。今みたいに少なくなった理由はわからないけどね。アワビは戦前から漁協の管理でした。「十三浜漁業組合」と言ったね。

アワビの開口のときは女も船に乗り、「ともどり」（櫂＝船尾を動かすこと）をします。女が櫂を動かし、アワビを採るのは男の人です。

獲る方の人は、口がすっぱくなるくらい喋って指示するのです。「おせ」は「櫂（船尾側）に進め」の意味で、「おせろ」は「（船首に向かって）右に」、「しけろ」は「左に」、「ねろ」は「その場所に固定しろ」の意味です。

私らが小さいときは、採ったアワビはここで剥いていました。アワビは業者が買うのですが、その業者が、身を剥く仕事をさせていました。仕事の工賃は、お金でなくて、ワタ（内臓）でした。うちのおふくろは、そのワタをバケツに入れて持ってきていました。そのワタを塩辛にしてそれを行商して、米と交換したのです。

アワビの身は、乾燥させないで、そのまま持って行きました。ミヤカン（宮城缶詰）という会社が買ってアワビの缶詰にするのが7割くらい占めていたんじゃないかな。アワビの缶詰を作っていました。缶詰は韓国の方とかへ輸出していたようです。

■ コンブは開口より漂着の方が多かった

私たちが小さいとき、ここの漁業は、アワビ、ウニ、天然ワカメ、天然コンブが中心でした。

ワカメやコンブは、みんなで採ったものでした。天然のものを刈ったら流れてくるので、それを漂着物として浜で採りました。刈るのは開口だが、漂着物を拾うのは自由。見つけた人が採ってよいのです。

たくさん漂着したんです。開口で採るより漂着の方が多かったくらいです。とくにコンブは、開口より漂着の方が3倍以上多かった。大きいコンブなんか、我々の見えるところには滅多に付いていないんです。深いんで

す。だから開口で採るということはないんです。

コンブを拾うのは、鉤で引っかける人もいるし、手で拾う人もいます。いろいろですよ。海に浮くから、海に入っていって採る人もいます。先に行ってつかんだら自分のものになる。早い者勝ち。その人の勘で行います。誰も教える人はいないから。波を見て行くとかね。その人の努力さ。コンブは潮に乗ってきます。昨日寄ったから今日も寄るというわけではない。行ってみたのに全然ないということもあります。その人の頭だね。

他の部落の人はダメです。部落の境へ行って少し越境して採ると、隣の部落から文句が来る、ということもあります。

今でもワカメ、コンブは拾います。養殖が始まって拾うことは少なくなりましたが。買う人がいなくなったからです。ワカメの漂着物は固くなり、質が落ちて低い等級になります。コンブは逆に漂着物の方がいいのです。

■ 秋田からお椀屋さんが来ていました

昔はコンブを掻いて、とろろ昆布を作り、それをおふくろが行商にもっていったりしていました。あれが甘くておいしいんだよね。砂糖みたいなのが浮き出ていてね。機械でやる今のとは違ってね。

私の家に、秋田の雄勝町（現湯沢市）からお椀屋さんが来ていてね。うちに泊まって、ここでお椀などを売っていました。その方がもってきていた道具でトロロを掻いたのです。

お椀屋さんは、平渡けいいちさんという名前でした。昭和７（１９３２）年の火災でここが焼けたとき、40人分のお椀を平渡さんに持ってきてもらった。昔は家で結婚式でも何でもやったので、そのくらいのお椀が必要だったのです。

おじいさんが日露戦争のときにこのお椀屋さんと一緒になったらしいんだね。富山の薬屋さんみたいな恰好

で、お椀などを背負って来ていました。戦後も、昭和42～43（1967～68）年ごろまでときどき来ていました。

この人に「ホヤはきゅうりと合わせるとおいしいんだよ」と教えてもらいました。そういう物知りなおじいさんだったね。

構成／宮内泰介

佐藤清吾（さとうせいご）さん

規制はあるが、そのなかで自由にやる。そうやって「漁民自治」をつくっていくんです



昭和16（１９４１）年生まれ。大室集落出身。北上町十三浜漁業協同組合の組合長（平成19年の宮城県下31沿岸漁協による合併以降は、宮城県漁業協同組合十三浜支所運営委員長）を２回にわたって務める。震災直後に再任され、平成26（２０１４）年６月まで３年間勤め上げた。息子さんが１人、娘さんが２人いる。

■ 漁協組合長を２回勤めました

私は平成10（１９９８）年にはじめて十三浜漁業協同組合の組合長になりました。それまでは、十三浜では養殖の種類は規則として２品目に限定されていたんですが、私が組合長になった時に、リスクの分散という点から制限を撤廃しました。ただし養殖本数の制限はあるので、それを超えない範囲でいくらでもやりなさい、ということにしました。組合長は平成20年（２００８）年までやって、いったん辞めました。

震災が起きた直後の６月、当時の組合長の任期がちょうど切れたんです。するとその直前の５月のある日に、

組合員たちが私のところにやってきて、みんなで立ち上がるための活動をするには、組合長が私でないと無理だ、というような話を言われて。「俺なんかそういう立場でないから（人の面倒を見られる状況じゃない）」と固辞したんだけど、組合員たちも感情が走ってしまったんだろうね。何回も断っていたところ、あるときに来た漁師が「この惨状から、逃げないでくれ」って私に言ったんだ。それが一番効いたんだね。それがなければ、私は息子のところ（宮城県多賀城市）に行くつもりだったんですが。

委員長の再任を引き受けたものの、こんな震災直後の状況でどうやっていったらいいかって、誰も分からないからね。当初は皆さんの支援で何とか生き永らえたけど、次の年も同じようにっていうわけにはいかないだろうと。だから漁業の復活を第一にやらなければって思ったんです。それにはまずもって、漁場の片付けをしなきゃならないと思い立ちました。

でも当初は、足並みを揃えるのが難しかったんです。震災の被害の大きな人、少なかった人、かなり差がありましたからね。自分たちはすぐに動けるのに、皆が皆同じところからスタートというのでは、利益を損なってしまう、という人たちもいましたから。でも、組合長として、そういう考えはダメだよ、って言いました。私はね、絶対同時スタートでなければダメだ、って許しませんでした。だから皆が持っている残った船は全部借り上げて、養殖復活のための共同作業に提供すると、そういう形をとりました。委員長としての決断でした。

委員長にはそういう判断が問われます。たとえば普段の漁場が高齢化で、誰か辞めるとなると、放っておけばその漁場を何人かで取り合ってしまう。これは、本来は組合に返納することになっているんだけども、実際には縁故で譲るケースがあるんですね。他にも、ホタテ養殖は50本、ワカメ専科だったら40本、とかの制限を設けてあっても、実態としては70本も80本もやっている人がいたりする。労働力もあって意欲もあるんだけども、問題がある。その一方で、15本とか20本しかやっていない、もしくはできない人もいる。そういう人たちにも漁場と

機会を与えようと仕組みを作ったんですが、ところが実態が伴わず漁場が確保できない。実際は多めにやっている人がいるからだね。

こんな風に、まじめな人たちや、やりたいやりたいとなる人たちの、両方の不満を抑えながら組合を回していかなければならない。ここで漁業をするには信頼が大事。定置網の漁業権の更新についても、本人の地域における評判だとか人格というものが重視されるんです。他の人に迷惑を掛けてまで自分の利益の主張をする人は、やる資格がないと断じられてしまうんだね。

■ いろいろな仕事をやったんだね

私は、中学を出てくらいから、船で出るようになりました。父親は、半農半漁だけど「海の人」だったんだね。船上でセメント50貫（187・5キログラム）を運ぶような力持ちで、体の大きな人だった。私はアワビを獲るのが好きでね、親父と兄といっしょに、潮の流れが速くて上級者向けの、たとえるなら「アワビの大学」みたいな、大指と小滝の間の沖合いにある黒島に行っていました。私は学校の勉強が嫌で逃げていたんだけれども、アワビは値が高くて、そちらの方に尽力していたんだね（笑）。「将来はアワビで食べていこう！」なんて考えていました。そうして25、6歳の頃までは家にいて、家の仕事を手伝っていた。たとえば春になったらイモの種蒔き、麦、田植え、天然ワカメの刈り取りといったようにね。ワカメの刈り取りは天気がよければ毎日やって、乾燥させていました。ワカメも黒島に獲りにいったね。秋には天然コンブも獲っていました。コンブは、カマでは届かないような水深のところに生えているから、木の棒をね、ねじり棒のようにして巻き取った。当時は獲ったコンブを浜で乾燥させようにも場所もないような盛況ぶりでね、ワカメやコンブを乾燥させるときは一年に一回、くじ引きで場所を決めるんですが、やはりいい場所に希望が集中するんだね。

私は昭和42（1967）年、分家になってまもなく目を怪我してしまって、専業の漁家になるのは難しかったんです。そこで三陸沖のマグロ船に機関士として乗船して、3年くらい働いていたこともあった。陸に揚がってからも、いろいろな仕事をやったんだね。石巻の不動産業で数年働いたり、そこの社長が大室出身だった縁で、社長が衆議院議員の選挙に出るのに気仙沼に通って選挙事務所の選挙対策で働いたりもありました。いろいろあったんです（笑）。その後また石巻で、共同の家具屋の営業をやっていたこともありました。これは10年くらい続けて、4、5年で常務にまでなりました。当時は家具の販売が歩合制でね、営業マンとして走り回っていました。とにかく、「食うため」にいろいろやっていた時期だったんですね。その時は将来どうしよう、という気持ちはあったんですが、当時は職がいっぱいあったんです。そういう時でも、アワビの開口があって助かったんですよ。どこにいても十三浜に飛んで帰って、一日頑張れば、当時の給料3ヶ月分以上になったものだから。

その後、家具屋は耐久消費財を扱っていたから、だんだん回転が良くなくなってきて、資金繰りも上手くいかなくなってきた。結局倒産して解散ということになりました。そういうことがあった後、十三浜の8つの集落から1人ずつ出て務めることになっていた漁協の理事をやることになりました。理事をずっと続けていたところ、平成10（1998）年に推されて組合長になったんです。若い頃にとにかくいろいろやって、社会で経験を積んでいたことが組合長になってからも役に立ちました。

■ アワビ獲りには自信あり

アワビは昔、集落にとって大きな収入源として十三浜の生活を支えていたんですね。今は嗜好品になっているけれども、とても大きな存在だったのです。アワビの開口のシーズンは、通常11月から翌年2月までと決まっています。昔は3月までやっていた頃もあったんです。それと、6月に「夏アワビ」ということで獲っていた時期

もありましたが、夏はアワビの繁殖期に当たるというのでやめようとなりました。開口は、11、12月は3～4回と多く、翌年1月からは、それまでの水揚げ量次第で決めます。開口するかどうかはその日の海の条件によります。アワビを獲るには、晴れで波の無い凪の日がいい。水の透明度が大事なんですね。組合長と、組合員の中から選ばれた「開口委員」の2人が海を見て、天気図を見て開口するかどうかを判断します。日和を見るのが大事なんです。開口したら、スタートは夜明けの何時からでもいいんですが、終わるのは10時と決まっています。開口は十三浜全体で行います。どこの集落の人がどこに行って獲ってもいいんです。小滝の方に行くと波が荒いんですが、よく獲れるので、腕に覚えのある人は小滝に行きます。アワビ獲りは人によってかなり差がつくものなんですね。私は、昭和40（1965）年頃には、朝6時から10時までの開口の12日間で、当時の値段でおよそ360万円分のアワビを獲ったことがあるんですよ。大室は水揚げ量が多かったんです。

ところが、韓国でアワビの養殖が始まって、それが安く出回って、国内のアワビの大きな値崩れが起きてしまった。さらに、アワビを夜中に密漁しにくる一団もいたのです。海に潜ってアワビを根こそぎ持っていこうとするわけです。私が漁協の組合長になって、精力的にパトロールして密漁を根絶しようとしました。海上保安庁も監視船を出すのですが、もっとしっかり監視してほしいと、私らが監視船を監視するような恰好でした（笑）。

さらに磯物全体が、磯焼けが起きるようになってからさっぱり獲れなくなってしまいました。昔は、北上川から栄養が含まれた水が流れてきたら、河口にもプランクトンが増えて、それで海藻も生えて、小魚をおっかける大きな魚が寄ってくる、という風に回っていたんですがね。磯焼けの原因としては、海水温の上昇や、養殖業が盛んになったことなどが言われているけれども、両方ともあるでしょう。「養殖物は、磯を悪くする」とも当初から言われてきた。藻類が磯ではなく養殖施設なんかに付いてしまうこともありました。でもね、自然についたものだけ獲るというのは、生活をしていく上でとても不安定なんです。漁船漁業では回遊魚などのいろいろな魚

を、多大な投資をして遠洋まで獲りにいっても不漁になることもあるけれども、養殖をして、近くの海で生活が維持できるほどの収入があるということは、生活が非常に安定するということなんだね。だから養殖業が盛んになるのは道理でした。たとえば、天然のワカメとかコンブの開口をやっていたころは、収穫量が人によって10倍ぐらいの開きがありました。ところが養殖ワカメというのは、腕のよしあしに関係なしに、きっちり獲れるということで、そりゃあ皆に受けたんだね。大きな時化がない限り、天候にもあまり左右されないという魅力もありましたから。

■ 十三浜は養殖を始めて、変わったんです

もともとこのあたりは、天然ワカメがものすごく豊富だったんです。天然のころは乾燥させて、足で踏み固めて10貫目の俵にして、出荷をしていました。養殖を始めたころ、当初ワカメは垂下式でやっていました。しかし垂下式だと、ワカメの品質があまりよくないなどの問題点があって、その後に水平式に代わりました。ワカメの保存も、乾燥から塩蔵するのが普及するようになると、養殖ワカメは一気に定着しました。そして今では「十三浜ワカメ」のブランドとして認められるようになりました。ワカメの養殖に、自然条件が一番合っているんです。というのも、北上川が栄養を運んでくれること、適度な淡水がワカメの成長によいことがあるおかげだと思っています。

養殖が定着するまでは、皆出稼ぎに行っていました。大室でも6〜7割の人が出稼ぎに行っていました。10月いっぱいで、アワビの開口の日に合せて地元に帰ってくるような感じでした。ただ、ワカメの養殖が少し軌道に乗った後でも、ワカメの作業が終わると皆出稼ぎに行ってしまう。家族でずっと北上町で一緒に暮らせるように、これをなんとかしなければいけないということで、その間の期間、具体的には5月以降を利用して、コンブ

の養殖を考えたんです。ひところはコンブも値段がよかったからね。その養殖の定着のおかげで出稼ぎが相当減りました。その後はコンブの価格低迷もありましたが、新しく始まったホタテの作業は、周年で作業があります。7、8月はホタテの水揚げ時期に当たります。こうして、専業の漁家は、ワカメ・コンブ・ホタテと周年で仕事があるようになりました。とはいえ、兼業の漁家は、より多くの現金収入を得るために引き続き出稼ぎにでていました。コンブはワカメより単価は安いんです。でも生産費もかからないし、ワカメが等級をあげようとすると、中の塩を抜くだとか、細かい作業があるのに比べて、手間暇もかからない。コンブは作業を大まかにやるために1日の生産量が圧倒的に多いんです。だからコストも低くなる。ホタテの養殖が定着したことで、出稼ぎに行く人は少なくなっていきました。でもホタテは、夏場に水温が上がり過ぎると、斃死してしまう。病気が蔓延したこともありましたから、私は今後温暖化が進むと、ホタテはさらにやりにくくなってくるのかなぁと考えていたんです。

■ 震災後、十三浜の漁業を復活させる

震災直後に再び委員長になると、まずは漁港の復旧作業を共同で行い、陸上で散乱した資材の片付け、瓦礫処理などをしました。陸上の瓦礫の撤去は基本的には国からの予算が、1日働いて1人1万1000～2000円程度出たのでやりましたけど、海上の、漁場の片付けや新しい漁場の敷設もしなければならない。そこで組合員たちにタダ働きをさせてはならないと、漁協からまとめて日払いでお金を出しました。瓦礫の処理と整備は平成23（2011）年の8月上旬には終わりました。ただ沈下している瓦礫が全部なくなるということはない。底の方まですべてとるのは不可能でした。家が丸ごと沈んでいる場合もありましたから。それをなんとかしようとしたら、養殖の来季の種付けに間に合わなくなってしまう。とにかく舟が航行できるように、最低限のことはや

ろうと話し合いながら、作業を進めました。片づけと並んで、瓦礫処理の後の資材の調達が一番難しかったです。資材というのは、ロープとか浮き玉とか、アンカーブロックのことですね。どれも必要で、購入しようと猛烈に働きかけたんだけど、国内では供給が追いつかない。注文した資材が届かないってことで、復旧作業が停滞した時期もありました。そうしたなかで、十三浜漁協は、組合員が震災直前に１１０軒ほどいたんですが、震災を機に辞める人が10軒くらい出ました。辞める人たちは、主にもう高齢だということ、震災のダメージから立ち直るのに新たな投資をするのが億劫だ、という理由でした。

震災のあった年には全体でワカメを１８００本、ホタテを２００本やりました。復活のためにはまずはワカメでした。養殖を再開しようとしたとき、ワカメの養殖を新たに始める人が3、4人いたんですね。震災前は他の養殖をやっていた人も、まず再開に着手するのはワカメだった。たとえばホタテは再開しようとするときの初期投資がかかりすぎてしまうし、お金になるのも、償還できるのにも時間が掛かる。なので、ワカメの養殖が多くなったのではないかなと思います。みんな、ある程度お金を貯めてから別の養殖も始めようと思っていたところもあるでしょう。コンブもほとんどやらなかったです。

■ たくさんの支援を受けて、養殖を再開させました

養殖再開に対して付いた補助は、国が3分の1、県が3分の1、個人が3分の1負担という割合のものでした。船は石巻市では個人が9分の1負担でしたね。自治体により異なりました。再開する際には十三浜の各地に、水産庁から1箇所（大室）、パルシックから6箇所（小泊、大指2、相川、白浜、小指）に、先方におもに負担してもらって作業所を整備することができました。それに、「復興サポーター制度」を漁協が窓口になって設置して、全国の皆さんに支援を呼び掛けました。それで集まったお金については全額、組合員の養殖漁業復興のた

めに使わせてもらいました。

それでも資材不足で作業が停滞したり、連続して海が荒れたりしたため、思うように復旧作業が出来なかった時期がありました。一生懸命やりましたが、震災直後にワカメ・コンブの種付け作業やイカダの設置が出来たのは、以前からすると70パーセントほどでした。そして最終的に種付け作業が終わったのが大みそかでした。通常は11月末にはほとんど終わるから、収量もあまり見込めないかと思っていたら、震災翌年にできたワカメに、普段からしても一番良い値がついてくれたんです。再開した人たちもこれで報われた、いけそうだ、という気持ちになれたんです。それに、震災の年は種付けしなかった、できなかったという人たちも、やる気になったんじゃないかな。実際、ワカメもコンブも、震災後の海で成長具合がよかったのは事実です。

平成24（２０１２）年の2～3月に磯物の開口をしたんですが、地震と津波で地形が変わって、地盤沈下が起きてしまった影響が大きかったです。満潮時の水位が低くなって磯物が獲れなくなったり、磯に寄せる波の上げ潮と下げ潮の幅や、潮干帯がまるで変わったりもしました。開口した日以降は自由に獲れるようにしたんだけど、サッパリだったね。その頃は磯物に皆の目が向いていなかったこともありました。それでも2、3年したら磯物はだいぶ獲れるようになり、戻ってきた印象があります。アワビもやってみました。平成23（２０１１）年の12月に1度試しに開口してみたんです。津波で小舟の多くが失われたから、1軒1軒ではなく、共同で舟を出して行ってみました。その前に行われた県の調査で、アワビの稚貝が湾内から震災前から90％もいなくなっているという報告があったんです。しかしだからといって1回も獲らずに禁止するというのも皆が納得しにくいと考えたので、皆に実態を体で分かってもらおうと思って舟を出すことにしたんです。行って見てみると、やはりアワビは少なくなっているのが皆分かったんですね。このままだとどうやっても先細りする構造だから、母貝に圧力をかけずにアワビ漁をする工夫が必要になる、となったわけです。結局その年は計4回開口を行ったけど、現

状を考慮して年内の12月にやめたんですよ。こうして震災後3年間、2度目の組合長を務めましたが、平成26（2014）年6月に年齢制限もあり勇退しました。

■ 集団移転はなかなか進むのが遅かったです

大室集落の集団移転は、なかなか進むのが遅かったんですね。最初の動きは十三浜の中でも一番早いくらいで、震災後の1週間後にはもう青空集会みたいな話し合いをしたんですが、移転場所について当初から地権者とのいさかいがあって、難しかったんです。それに市の方から、大室と相川は集団移転を一緒にやった方が良いとも言われていて、相川の進捗状況を待っていたのもあった。結果的に、他の集落に比べるとちょっと取り残されてしまったね。そうやって時間が経つにつれて、最初は同意していた地権者は話が違うぞとなってしまった。「地域のために」という意識でみんな1つになれるはずが、なかなかそうはいかなくなる。それでも、移転にかかわる最後の地権者が条件付きで同意してくれて、ようやくね…、やはり人数が多ければ多いほど、合意を得るっていうのは難しいんですね。それに大室は、北上町の集落の中でも人が多いほうだったからね。結果として、移転地に住む人は、震災前の半分くらいになりました。大室では、道路の嵩上げも、巨大な防潮堤も要らないと言ったんです。それより大事なのは、皆の生活に必要な施設です。新しい十三浜漁協の事務所も大室の移転地の近くにできました。そしてそのすぐ傍に、小泊集落との複合施設「相川地区復興支援センター」が建つ予定です。

■ 震災後に地域で変わったこと・変わらないもの

大室の契約講は、継続することになりました。震災後大室から遠く離れている人も、あえて脱会しない限り

は、関係は継続するものとしたんですね。もし自らの意思で脱会する場合は、契約講の預貯金の動産の50分の1を渡すようにしてね。不動産については、昔からもしもの時は、共有財産の分割請求権を破棄すると決まっていたんです。ただ震災後、契約講を抜けて大室からも転居する人が多かったです。移転先は、石巻市内や河南町、河北町などでした。漁業権の保有については、地区内に居住するというのが条件でしたが、契約会の脱会後も当面の間は持つことができる、としました。集団移転完了までは考慮しよう、というのが大方の意見でしたから。

集団移転で、これからさまざまな文化が混ざり合うわけです。それぞれに心のよりどころとなるものはあるだろうが、時間が経つとだんだんと薄まることもあるだろうと思います。それでも、伝統的なものを大事にして、あらゆるものをバランスよく復活させればよいのではないかと思うんです。

■ 今後の十三浜漁業のかたちの模索

漁業の復活はまだまだ構造的な面で厳しいです。日本全国で新造船時の建造費用が高騰してしまって、船を新しくするのが難しくなった。家を建てる資材やコンクリート、人件費も根こそぎ高騰しています。東京オリンピックの影響もあるんじゃないかな。売り手市場ですよ。大惨事に便乗して実施される過剰な市場原理主義的な変革、ショック・ドクトリンのような、財界の都合による復興という名の開発が横行しているように思います。漁協の青年（研究）会では、震災前からホヤの養殖を研究していました。国内のホヤは、消費の8割近くが韓国への輸出だったんですが、震災の後、平成25（2013）年に福島原発事故の汚染水問題を理由に輸出が一切禁止されてしまいました。現在（2017年）でも、まだ解除されていません。

漁業を協業でやることについては、否定はしません。労働力が足りない時には協力することが必要な時があるのだから。それに元々私たち漁家は、自然発生的に共同できるようになっているんです。ただ、その結果とし

て、それぞれの労働力の違いによって不満が出てきてしまうのではないかなと、心配もしています。協業するには平等で出資する、出し合うというのが基本だけど、労働力や能力がどうしてもバラバラになってしまうのが難しい原因じゃないかと考えています。これからずっと協業だといって、末代まで協業が成り立つかについては疑問が残ります。漁業全体で考えたときには、協業形態というのは、一過性の出来事なんじゃないかと考えます。漁業は本質的な部分では、個人・個別でやるんだ、というのがありますから。十三浜の漁家の気質みたいなものがあります。漁連（宮城県漁業協同組合連合会）の監事をやっていたころに分かったんですが、十三浜は漁家1人あたりの借入額が一番少ない部類に入るんですね。他の支所では数千万円、多いところでは一億円も借りているところもあるのですが。健全経営は十三浜地域の特徴というか、人からお金を借りて仕事や事業をするのが嫌なんだろうなと思いますね。

今後の漁業は、基本的にはワカメの養殖メインを継続させながらも、災害や病気のリスクを分散させるために、多種目にやるべきなんではないかと思っています。ロープ40本までの規制はかけるけれども、その中で自由にやってほしいと。そうやって「漁民自治」を構築していくんです。好んで、1種目に絞る人もいますが、漁業としてはさまざまなものを復活させていきたいなぁと。震災前とは養殖の状況も変わりました。震災前の海は混植状態であることが指摘されていて、たとえばワカメとホタテでは育てている水深が違うのですが、水深によって潮の流れが違うので、過密状態だとロープがぶつかりあって、ワカメが隣のホタテを全部駄目にしてしまうことがあったんです。そうした以前からの過密の課題に対しては、震災は、疎植に切り替える機会でもあったわけです。状況に合わせた養殖のかたちをつくっていって、とにかく早く、従来のように、海に出ればそれだけの見返りがあると。そういうふうに戻したいんです。

■ 北上の未来

北上に残った人は、今後は人が集まる機会を作ることも考えていかなければならないと思います。人が集まらないと、人口が自然に減っていってしまいますから。

十三浜南部神楽が震災後に復活したのにも、バラバラになった人を繋げるっていう大きな役目があると思うんです。そういうことでもなければ、地域が震災でしゅんとなっただけだったはずです。生きるための仕事だけが、元に戻ればそれで復興が終わり、じゃないんですね。それと並行して、必ず神楽のような伝統文化も、すべての行事、年中行事も同時進行でまた始められるようになって、そこではじめて「復活」というものが成るのだと考えます。あくまで生業の復活だけ追い求めて、あとは忘れられてしまうようではダメだと、そう思っているんです。

構成／黒田暁

阿部滋さん
海には魅力がなかった。
今は、やり方ひとつで海で暮らせる



昭和25（1950）年、小泊生まれ。高校卒業後、仙台で就職し結婚を機に小泊に戻る。父親の漁業を手伝いながら仲買の買い付けの仕事にも携わる。その経験からホタテ養殖を始める。震災後、十三浜でホタテ養殖に取り組む4人でグループ「浜十三」を作り復興に取り組んでいる。津波で失った家を高台移転で再建中。

■ 海は嫌いだったの

生まれは昭和25（1950）年。親父が漁業やっていました。乾燥ワカメと刺し網だね。刺し網は季節によってなんでも獲っていたみたいだね。その頃は養蚕もしていました。だから、その頃の家は少し背の高い人はぶつかるくらい天井が低かったんだ。養蚕が結構金になったから、うちの親父は他の家と比べれば地元にいる方だったです。あとは、仕事の合間に少し出稼ぎ。

親父は海で夜1回遭難しかけたことがあるんです。3人乗って漁に出て、帰りに急な時化が来て帰れなくなっ

て、ちょうど沖を通った貨物船に助けられたんです。貨物船に乗り換えた後、引っ張られていくときに漁船はひっくりかえってしまったの。そういうのを見ているから自分は海にはあまり興味なかったんだね。小さいとき漁業を手伝ったりしてないんです。

高校は工業高校の化学科です。石巻のおじさんのところから通っていました。就職は長靴とかカッパを作っていた弘進ゴムという仙台の会社です。長男だから、漁師やんなきゃいけなかったんだけどね。その頃、ここの海はだれにも魅力的に見えないの。ワカメの養殖はやっていたんだけど、あとアワビ・ウニでしょ。それでも生計できなくて出稼ぎ行っていたから。だから海には魅力がなかった。海は嫌いだったの。

ゴム会社では、製造の仕事でした。でも、口下手だなと思ってね（笑）、今度は車の営業の仕事にコロッと仕事を変えました。日産プリンスです。車好きだったからね。ところが車買うくらいの金ないから、そこさ行けば車乗れると思って。当時は北上町に車1台くらいのもんだったの。オート三輪ばかりで乗用車ってのはめったに走ってないから。営業はおもしろかった、飲んでばかりいたからね。

■ 結婚するときは海するって言ってなかったです

昭和50（1975）年、25歳のとき家に戻って来いということで、石巻の日産サニーに勤めたんです。そのとき結婚しました。結婚するときは海するって言ってなかったです。

2人で生活するには苦しいから、石巻の日産サニーにはそんなにいませんでした。家から（稼ぎのよい）仕事に通うようになりました。高校にいるとき石油類2類、4類とかいろいろ免許取っていたから、阿部改進商店っていう会社でプロパンガスのボンベの配達業者をしたの。トラックは自分持ちで、半島部を回りました。配達の最後は、山のところ（上）に家があるからプロパンのボンベを担いで行くしかないの。歩合制で、結構金にはな

りました。大卒で10万もらうか貰わないかの時にね、月に40万から50万になっていたから。

漁業は親父の手伝い程度だね。ワカメだけでは食っていけなかったもんでね。親父はぜんそく持ちで、1年くらい一緒にやっただけです。親父が病院暮らしになったから、おふくろと俺ら夫婦の3人だけで仕事やったの。その頃は、本当に大変だった。ワカメ朝1人で刈ってきて、俺は籠に入れるだけで終わり。そこで、朝ご飯と昼のお弁当持ってさっさと勤めに行くの。おにぎりかじりながら運転するのさ。残りのワカメは、家で乾燥機の中に入れてもらってね。

■ ホタテで食べていけるって思って

そういう生活を2年くらい続けたかな。そのあと、会社の方針で経費が掛かるからそういう配達業者を廃止にしたわけさ。会社が自分でやるってことで。海だけでは食えないから、白浜に昔あった白浜ホテルで働いたんです。白浜ホテルをやっていたのは、もともと飯野川で魚屋（仲買業者）をやっていた魚久（うおきゅう）物産って会社なの。漁業やりながら、そこにも行ったんです。

仕事は、魚屋がメインです。ホテルの仕事は忙しいときだけ、大型免許も持っているからバスの運転をしてお客の送迎とかもやりました。ガス配達で半島回っていたから、浜を回ってホタテの仕入れとかをしていました。魚久物産で扱ったメインがシジミだったから、北上川沿いにずっとシジミを集めたりもしました。シジミを仕入れに青森の十三湖に行ったり、築地に出しに行ったりもしました。

ホタテの買い付けに歩いていたら、その頃ホタテがうんと高かったの。買うより作った方がいいんじゃないかって思ったんだね。値段がいいのも分かっているし、養殖している人たちから買っているからノウハウっていうかね、養殖の仕方もだいたい分かっているから。ホタテの養殖をやっている人は当時十三浜にはいくらもいな

かったね。

その2、3年前から養殖の技術はあったんです。大指の漁協の青年部の研究会でホタテの採苗器入れてみたら、ここで種が採れたわけさ。地種っていうんです。それまでは、雄勝でも女川でも北海道から少し大きいホタテを買ってきて養殖するんです。そうすると金がかかる。種からだとただからね。採苗器入れてホタテの種が採れたもんですから、順調になったのさ。それで、魚久辞めてホタテ養殖始めたのさ。ホタテで食べていけるって思って。昭和58（1983）年か59年くらいのことです。

どうせやるならと最初からどんと大きく、最初から船も少し無理して大きく作って、当時で目いっぱいのことやったんです。需要もあるしね。最初の1年目はどこからか種は買ってきたのね。2年目からは採苗器入れているから地種使ったんです。

■ ホタテ養殖はサイクル

地種を採るには採苗器のネットを5月末に沈めるんです。岩手県の方から種が流れてくるんです。昔は八重桜が咲くころとかカンでやっていたけど、今はいるかいないか調べて教えてくれるんです。毎週のように漁協から教えてくれるんです。今は確実なの。

あとお盆過ぎ8月末から9月初めにかけて種を採るんです。ネットについた種が10ミリから大きくても15ミリくらいになりますから。採苗器の袋に入ったやつを出して、パールネットっていう四角い1尺四方の籠に移し替えするんだね。1つ30個平均に入れ換えたらすぐ海に入れて、それを来年の1月2月にまた籠の入れ替えするの。それまでに、だいたい40ミリの大きさになっているんです。それを網目が大きい10段の提灯籠というのにさらに入れ替えするの。数減らして、今度は1籠20個くらいずつ。それをその年の10、11、12の3か月にもう1回

入れ替えするの。今度は10枚から12枚入れて。だんだん籠の目が粗くなっていくから。販売はさらに翌年の5月になるの。

今年採った種は、再来年5月から販売ということになるんです。だから海の中でまるまる2年かかるの。販売は、だいたい8月いっぱいで終わるようにして、場所を空けて次のホタテを入れるんです。サイクルだから。

ここは外洋なもんですから、ネットの籠に入れるんです。ホタテは普通、耳吊りっていって貝殻の元の方に穴を空けてロープに対で2個ずつ繋ぐんです。それを13メートルくらいロープに１００枚から１５０枚くらい付けて吊るすんです。それだと、ここは潮の流れがあまり早すぎてぶつかり合って絡まる率が高いっていうことでネットが主流なんです。

■ ホタテが一番メイン

ホタテの入った籠はロープに吊るしてあるんです。横のロープは漁協の決まりでは1本１００メートルと決まっているんです。それに1メートル間隔とかでネットの籠が付くんです。ロープの端と端はブロックで片側2個ずつ4トンの錨で止めているんです。ここの漁協の決まりは、ロープはホタテの養殖やっている人は最大50本。50本の中にワカメやコンブの本数も入っているの。全部入れて50本。十三浜でだんだん本数が増えてきて、漁場が沖へ沖へと行ってしまってね。それで制限を設けたんです。震災前は、うちは10本ちょっとだけワカメ。残りはホタテ。コンブはいくらもやっていませんでした。

震災前3年くらい出荷前のホタテが死滅することが多かったの。北上川に近い方のロープはダメで、大指の方へ吊るした人はいいから、原因は最初は川水だと思ったんです。ところが違うんだね。人によって大指の方が余計に死んでいる人もいるしね。その辺は分からない。何か潮の流れの関係なのか。40トン水揚げを見込んでいた

ら、それが実際は25トンくらいになった年もありました。

小型定置は30年以上やっているかな。親父はやってなくて、やめるって人から権利は譲られて、俺からやったの。その頃、小型定置やっていた2軒がうんと獲っていたの分かっているから。魚久で買い付けに行っているから情報を知っていたわけさ。

ところが始めて2、3年経ってもいくらも入らないの。5年くらいは赤字。その場所止めて別の場所に移したら、いくらか黒字になってきたの。10月から11、12月とね、サケだけ獲っているんです。

震災前、金額的にはホタテが一番メインで、次が小型定置。ワカメも同じくらい。コンブは家で使う分くらいしかやってないです。新しいことも考えているんだけど、軍資金がないし、規則で3種目以上養殖できないんだね。

■ 地震があったときは沖出しに

地震があったとき、家に居たんですよ。ちょうど家族がヒジキ干していて、それを集めている最中に地震来てね。俺はすぐ海に行くからって、船の沖出しに行ったんです。すぐに津波が来ると思ったね。こんなに大きいとは思わなかったけど。水深の深い北の沖の方まで避難したんですよ。

翌朝。明るくなったんだけど瓦礫がすごくて誰も船入れられないの。港に入ったら、我が家は残っていて、船の上で眺めた状態では、外観はどこも大丈夫そうだったの。これだったら2階に住めるなって思ったからね。船から上がってみたら全然違って、住める状態ではなかったけど。屋根の上まで津波かぶっていたの。屋根の上にワカメありましたから。

家に残った女房とかは、高台の親戚の家にみんな避難していました。小泊の人たちは心得ていてすぐ高台に避難したのね。小泊の人はみんな親戚の家に避難して、避難所には行かなかったの。次の日から食料や油類、ガス

ボンベ流れているやつ拾って、なんでもいいから食うもの持って来てね。水は、井戸からくんだり、白浜の湧水まで行ったこともありましたよ。なんとかうまく生活はしたんです。

■ ホタテの復興は後回しになった感じ

最初の年はワカメ中心でワカメ25本やったんです。震災前は20本もいかないんだ。ワカメは増やしたんです。平成23（２０１１）年の場合、ホタテはいくらもやれなかったんです。その後は、震災後もうちではホタテがメインなんです。

ここの漁協、県もそうなんだけどワカメが手っ取り早くできるっていうことで、震災の年のメインにワカメをしたんです。宮城県内から岩手県までみんなワカメでやったでしょ。初年度はあまりに良すぎてね。良すぎたから、翌年また増やすという人が随分増えたから。もうちょっと先を見ればね、増えれば安くなるっていう需要と供給のバランスも考えてやればいいんだけど。翌年からは値段はがたがた下がったんです。結局、それでホタテの復興は後回しになった感じなの。私は最初から5分5分くらいにしたかったんだけどね。

平成23（２０１１）年も5月末に地種の採苗器を入れたの。いくらも採らないけどね。震災前はほとんど地種だったけど、地種は最初から減らして、だいたいを北海道からの半成貝にしようと思っています。漁港の岸壁が津波で壊されたから仕事ができないでしょ。今までは船を横付けにして家族と人を4、5人使って作業やっていたけど、それができないから少し高くても半成貝でやっているんです。メリットは、仕事の量が半減するね。地種よりずっと楽なんだね。1年間海に見に行かなくてもいいしね。その分、余裕が出るね。今までは3年周期。半成貝は秋持って来て、翌年の7月に出荷。最後の8か月とか9か月間だけ養殖するだけで出荷できるでしょ。サイクルが早いからロープの本数が少なくなっても回るんです。

■ 宮崎まで定置の網買いに行ったの

定置の網も網全部流されてしまって無いから、平成23（２０１１）年の10月上旬、中古の網買ってきたんですよ。インターネットで宮崎に中古の網が売りに出されていたわけさ。宮崎までトラック3台か4台で行って買ってきたんだな。向こうとこっちで魚の種類も違うし、網の形も違うの。直してこっちのに近づけてやったんだけど、ダメ。2年間はあまり入らなかったの。そのあと、新しく網作ってからよくなった。

でも、魚の動きがこの震災以降は読めない。震災前までは9月10月はこの辺に入って、11月に向こうが入るって分かるの。それが震災以降読めなくなった。海の中の何かが変わったね。今のところ水揚げはいい感じだけどね。

■ ４人で組んで名前を「浜十三」としたんです

震災後4人でね、グループ組んだんです。みんな集落は別々。白浜と大室と大指。1人は私の弟なんです。もう1人は弟と同級生。もう1人とは若い時白浜ホテルで一緒に働いたことあったから。

みんな家は流されて、うちともう1軒は大きな船は残ったから、とにかく船2艘で4軒分やろうということでホタテの作業だけ共同でやることにしたんです。ワカメは小さい船で刈り取りできるんだけど、ホタテは大きい船じゃないと出来ないから。うちはうちで、しばらく堤防なくて、小泊で作業できなかったでしょ。ホタテは1か所に集積して4人でやっていました。ワカメ・コンブは別々に作業していました。

４人のグループの名前を「浜十三（はまじゅうぞう）」としたんです。十三浜を逆にして。うちの息子が浜十三がいいって。俺はサーティーンビーチにしようと思ったんだけどね。浜十三で4人で、第1弾としてワカメしゃぶしゃぶの販売をやってみたんです。

■ 浜十三を続けるかは柔軟に

２０１２年に浜十三をＬＬＰ（有限責任事業組合）にしたんです。ワカメしゃぶしゃぶの売り上げだけが会社に入るお金。品数は増やしたいんだけどまだ手も作業場もないからこれだけ限定で。個人個人が均等に品を持ち寄って、売り上げを会社の売り上げにしているわけさ。浜十三で売り上げた資金は、これからの海で使う機械の購入費用に充てるためにプールして置いてあるんです。

ホタテ養殖は設備がいるんです。震災前は個人で全部持っていたの。一気に７０００万円も８０００万円も買えないから、何年もかけて少しずつ買っていったのが震災で一気に無くなってしまったんです。機械も一人一台個人で買うより、何人かで1つあればいいと思ったの。個人で買うと金額が高くなるもんだから、４人で分割で。分割するのを個々が出すんでなく、ＬＬＰの売り上げから出させようと。

書類上は設立から5年後の平成29（２０１７）年の解散の予定なの。5年やれば、全員が作業場、家、船、そして岸壁（船着き場）ができて独立できるだろうということで、定款に書いたんです。実際、機械も揃って岸壁も直って平成27（２０１５）年からはホタテの作業は個人でやるようになりました。でも、平成29（２０１７）年過ぎてもそのまま継続するかもしれないです。共同で買った機械の整備が必要だから。

ＬＬＰにしたのは補助金狙いもあるんです。補助があれば会社としてもらってと。でも、ＬＬＰにしなくても補助金は出たようです。それにもう震災の補助金は出ないの。申請は1回限り、最初に出した1台で終わりなんだって。だんだん増やしていくんだから、矛盾しているなと思っているね。だったらこれだけの復興でいいのかと。

それでも、県の水産課からＬＬＰにして情報は入って来るの。ＬＬＰは無駄ではなかったね。続けるかどうかは柔軟に考えています。

■ １００％の回復は台数制限があってできないんです

ホタテはやる気なら１００％回復できるんだけど、筏の台数制限があってやれないんです。震災前はホタテ養殖やっている人だけ50本だった規制が、震災でみんな40本にしてくれってことでみんな40本になったんです。最初からうちは10本マイナスなのさ。もう10本あれば震災前に戻れるんだけど。それに、ホタテも買って販売する中間の業者が3分の1も減ったから、3年くらい売れなかったの。北海道のホタテが平成28（２０１６）年に台風で悪くなったらこっちの売り上げは戻ってきました。

40本のうちホタテは14～15本。あと5本がコンブ。あと残りがワカメ。うちはコンブは震災前からコンブだけの単張りだから。ワカメの3メートル下にくらいにコンブを張る方法もあるんです。でも効率が悪いんです。単張りは仕事して楽なの。ワカメ・コンブはみんな本数としては１００％超えているの。平成28（２０１６）年は秋サケはだめだったけど、平成29（２０１７）年のワカメの入札はいい値段が付きました。毎年違うんだね。

■ 高台には早く移転したかったです

今度の家は小さくこじんまりと。金がないからね。家族多いから2階建てでね。4世代8人だからね。高台の方に安全な作業小屋が欲しいです。従前地はいつ流されるか分からないんだから。高台移転は息子と世帯分離して2区画申し込んでいます。最低２００坪ないと。町場の１００坪は広いけどここの１００坪は狭いから。

1区画に住む家、住居。もう1つに作業小屋兼住居。ともかく風呂とトイレ、そういうのがないと家と認められないから、1階に風呂作って。作業小屋にはボランティアが泊まれる場所も作る予定です。2部屋ぐらい作れば男女分かれられるからね。

一番小さい孫が避難中に小学生になったから、早く移転したかったです。高台はこんなに遅くなるとは思わな

かったです。平成29（２０１７）年の年末までには入りたいです。

これからもメインはホタテだね。ホタテが楽なの。朝なら朝、売ってしまえば終わりだから。ワカメは1日中仕事あるでしょ。人の手数もいるし。前は4人5人頼んで、やっていたんだけど、今は人を頼めないんだよ。地元に人がいなくなったから。地元に残っているのは家業で漁業やっている人たちが残っているだけで、季節、季節で頼める人がいないの。

夢は孫たち誰か継いでくれればいいなと思うだけだね。俺のときは出稼ぎとかあったけど、今は海で暮らせるから。やり方一つでね。

構成／平川全機

佐藤喜美夫（さとうきみお）さん

この仕事は、自分の色を濃く出して、自分のローテーションでやることなんだね



昭和32（１９５７）年生まれ。北上町白浜集落出身。父親から引き継いで漁業をしている。養殖ワカメの他に、「本業」として小型定置網を１年通して（サケ、イワシ等）やってきた。定置網は始めてからもう半世紀以上となり、喜美夫さんで４代目になるという。家族は奥さんと娘さんが２人、ご両親と合わせて６人。津波で自宅が流され、平成28（２０１６）年12月に白浜の集団移転地に２世帯分離型住宅を新しく建て、移住した。

■ 養殖もやっているけど、「本業」は小型定置網さ

私は高校を出て少し、叔父（父親の弟）のやっていた仙台の土建屋で５年くらい働いた。ただ、海のノウハウはもう小学校の時から叩き込まれていたから。寝ていて波の音を聞いただけで、今日は出られるとか、出られないとかが分かるようになった。とくに低気圧や風や台風には注意を払う。天気は生き物みたいなものだし、天気

を見るのが、漁師の大きな仕事になる。海の仕事はたいへんだが、（収入が）安定している。昔から「仕事やだなぁと横になったりしていないかぎりは、漁業は食いっぱぐれることはないぞ」と周囲から言われていたんだ（笑）。だから、海以外の仕事は考えられなかった。自分が仙台に行っている間は、弟が父親の漁業を手伝っていたけど、弟が他の職業に就職することになって、いつまでもこうしてられないと、地元へ戻って漁師になった。父親は平成28（２００１６）年でもう86歳になった。震災の前、平成20（２００８）、21年の頃に漁師を引退したよ。家ではもともと漁船漁業を沿岸でやっていて、父親はスズキの１本釣りをしていた。私が小学生のときは、３馬力の木の舟を操っていたなぁ。スズキが釣れると、女川町に売りに行った。そのときも、自然相手のことだからさ、風を読んで舟で行くわけだ。漁師独自の知恵や経験というのがあるんだな。父親は他に、イカやタラなんかを獲っていた。それと、白浜の山で炭焼きもやっていたし、田んぼも１町歩５反くらい持っていたな。

うちでは、養殖ワカメをやっている。コンブやホタテの養殖はやっていないんだ。ワカメは昔と今とでは方法が全然違う。昔は垂直式で、海が荒れて少し波が来ると施設がやられてしまった。今は水平式だね。うちのワカメは、とくにサラダ、しゃぶしゃぶ用として早めに出している。もう年明けの１月３日からだね。最初に刈るのはしゃぶしゃぶ用なんだけど、その後に刈り取る塩蔵用のワカメみたいに、大きくなると、しゃぶしゃぶ用にはかえってダメなんだ。刈り取るのが遅くなると穴が空いたり、虫が付いたりというのもある。

養殖もやっているけど、「本業」は小型定置網さ。私で４代目に当たる。ワカメも定置網も自分が生まれる前からやっているから、もう半世紀以上やってきたことになる。サケやイワシの定置網は当初からやっていた。本来は１年間を通してサクラマス・イワシ・サケというように回していっていたけど、春先のサクラマスが良くなくて、それでその時期は養殖ワカメに専念するようになった。ほぼ１年を通して定置網をやるのはウチだけだったんです。定置網は、平成２（１９９０）年ごろは全部で５ヶ統くらいしかなかったけど、今は18ヶ統も稼働し

ている。サケがよく戻ってくる時期が続いて、各地でサケ孵化事業が増えてきて、その成果で、サケの定置網をやる者が増えたんだね。昔は、サケは天然もの、つまり銀サケだけだったけど、今は孵化事業で増えたブナサケの割合も多いんだ。どちらも網には入ってくるけどね。収入面で大きいのは、秋サケが一番だ。養殖ワカメとイワシがその次で、同じくらいかな。サケがうちのメインだね。サケは、石巻の市場に出す。次の日にはお金が出る。手渡しでもらう。うちともう1軒は石巻。あとの人は志津川の市場に出す。私たちは、昔から取引しているから、石巻に出している。

うちが定置を張っているのは、白浜ホテルがあったところの下のあたり。定置網の許可は個人にではなく、「十三浜漁協小型定置網」という形で下りてくるんだ。他の部落ではいろいろなやり方があるが、ここでは、私やめますと自分から言わない限り、半永久でできる。更新料が年2万円。網をやるのは楽しいよ。定置に掛かった他の魚を仮設住宅に配ったりもしていた。

■ イワシと秋サケの定置網漁

5月から9月までは、カツオの1本釣り生餌用のイワシ（カタクチイワシ）を定置網で獲っている。イワシはもうちょっと後の時期までいるんだけど、9月にはメインの秋サケが登場するから、イワシは途中でやめるんだ。両方同時にはできない。獲れたイワシは、志津川に出しているよ。カツオ船は、定置網のところまでイワシを受け取りにくることもある。イワシは、最低5～6日置いておくんだ。生け簀で泳がせる。自然のものだからね。水温によって歩留まり（傷みの進み具合）が違うのさ。夏場に水温が20度を大きく超すと半分は死滅してしまうこともある。じゃあなぜ最低5～6日置いておくのかというと、カツオの1本釣りはここから小型１００トンくらいの船で2昼夜くらい走るんだ。そして水温が最低25～28度くらいのところでカツオを獲るから、活きの弱い

イワシだと、漁場に行く途中で参ってしまう。だから獲ってすぐカツオ船に渡しているようでは、イワシがもたないんだ。

イワシは、その年によって漁の様子が違う。カツオ漁次第の部分がある。カツオ船の漁場が遠かったりすると、生餌用のイワシが捌けるローテーションがうまくいかなくなる。イワシにもエサを食わせて置いておかなければならないし。

秋サケは、9月半ば～12月初めに掛けてで、11月が最盛期だな。イワシの定置と秋サケの定置は同じ施設を使うんだけど、網の目が違うんだよ。イワシの大きさ（重さ）は1・5～2匁（1匁は3・75グラム）くらいだから、網の目も細かいものになる。網の目が小さいと汚れやすいから、手入れが必要なんだ。サケを獲るのは、網の目が3寸目（1辺3寸目の真四角）のものだけど、他にも5寸目と8寸目のものがある。サケをせき止めるのは8寸目、誘導するのが5寸目、魚をとる本体の網は3寸目、といったように使い分けている。サケの時期は網を毎日揚げるけど、最低25日に1回は網を交換しなきゃならない。うちは普段の仕事は家族で自分たちの範囲内でやっていたんだが、サケの時はとくに人手が要るので、会社を退職した方や親戚など、男手を3人ほど雇っている。サケも好漁不漁の差が大きくて、良かったり悪かったりが続いているね。年によってもたとえば回遊のスタートが早くて終わりも早いなんていうことがある。サケの回遊のコースはだいたい決まっているんだけれども、北上川の河口部分も、1年で流れが変わったりしているから。それとサケが三陸に来る前の時点で、北海道のサケ漁がどういう状況になっているか次第のところもあるね。獲れるサケの数はもちろん、値段も大きく変わってくる。たとえば北海道で不漁だと、こちらで獲った分の金額が高くなるんだ。それも始まってみないと、分からないけどね。

■ 1年間のローテーションが決まっているんだ

ここのワカメが「十三浜ワカメ」でブランド化されたのは、２０００年代に入ってすぐくらい。ここは河口が近いから、真水の影響を受けたり、春先だと、雪解け水が入ってきたりもする。真水が入っても、3日くらいはよいのだが、4～5日くらいすると、ワカメ自体に真水が入って根腐れしてくるんだ。そうなってくると、3～4日のうちに刈り上げてしまわないと、全部パーになってしまう。なかなかいっぺんには刈り取れないから、諦めるしかないこともある。

たまには大水が来て被害を受けるけれど、やっぱり川があるおかげでね、恵みがある。ワカメの育成にも淡水が結構入っていた方が、美味しいらしいんだ。うちでは3月くらいにシラウオの刺し網漁もやる。シラウオは雑魚として漁業権が設定されていない。県の条例で、北上川の河口付近上下1キロメートルは保護区域で獲ってはいけなかったんだけど、震災前は試験操業の特別採捕許可をとって、2月から3月にかけて1カ月だけ2艘引きの網で獲っていたんだ。でも震災で舟が流されて、それを機に今は刺し網（自由操業）で獲るようになった。3月はワカメの刈り込みシーズンだから、まだ夜が明けきらずに手元がよく見えないうちに1回シラウオの網を上げてそのまま置いておく。それでワカメの刈り取りをして、その後に獲れたシラウオを網から外すんだな。そういうのも、川の恩恵じゃないかなと思う。他には、以前ホッキ貝も獲っていた。水産試験場と一緒に、特別採捕の権利をとってやっていたんだ。自分がまだ中学生くらいの頃から、20年ほどやっていたな。うちで漁業をするのは、どの時期に何を獲るのかって、もともと1年間のローテーションが決まっているんだな。

■ 白浜の漁師の暮らし

白浜は昔、海水浴場としてずいぶん人を集めたんだ。昭和40年代が最盛期かなぁ。海の家が3軒も営業してい

たし、その頃は契約会で駐車場を運営したりもした。

海のすぐ傍で暮らしているから、台風が来るとなると、船を避難させたり、海の使わない機材を陸に揚げたりして、高台に持っていったりと忙しいんだよ。養殖でも定置網でも、資材や網は陸に揚げるんだ。網は、少々の時化は大丈夫だけど、北上川の河口近くでは、川の上流から濁流で大きなヤナギの木が流れてきたりするんだ。それがぶつかったりすると、網も破れてしまうから。

私は小学校4年生のときくらいからもう学校へ行きながら釣り船の手伝いをしていたんだよ。中学校のときは、もう自分の専属のお客さんをもっていた。釣りは好きでやっていたけど、若い時は、漁業の手伝いは嫌だったなぁ（笑）。自分が中学3年生のときから定置網を手伝い始めたんだけどね。その頃はおじいさん（父親）が共同で定置網をやっていたんだけど、うまくいっている時はよくても、いったんうまくいかなくなるといけなくなってしまうんだなぁ。よくない時期が続いて、10年近く定置網を休んでいた時期もあった。昔は販売ルートも限られていて、車を持っていなかったから魚屋さんに頼んで市場に持っていってもらったりして、今とだいぶ違って大変だったんだ。定置網をやっている人もほとんどいなかったからね。その後定置網を再開するとなったときは、今では考えられないけど、10年くらい浜に置いてあってもう埋まっていたような網を掘り出して、補修して再開させたんだ（笑）。その頃には、養殖ノリをやっていた時期もあったんだよ。木舟で作業をしていた。10年近くやっていたんだけど、結局河口の近くだからか、川からの大水で流されたりして、うまくいかなかったんだな。この仕事は、海の条件に合せて、自分の色を濃く出して、自分のローテーションでやることなんだね。メシの種を、自分で考えるのが大事。「我が道をゆく」「人の倍稼げ」っていう世界だ。

自分の代でも、田んぼを5反ほど持っていたよ。耕作は釜谷崎の人に頼んでいた。白浜の田んぼをやりたいという人たちの多くは北上大橋のあたりと、長面のあたりに水田を持っていたね。

■「契約会」を「部落会」に変更した

震災前の時点で、白浜の「契約会」を「部落会」に変更したんだ。年齢制限も50歳であがり、というのから55歳に引き上げた。もともと部落内でも（契約会に）入っていない家も何軒かあったし、でもそれなのに公共の公民館の維持費とかを契約会が出さなければならないという状況があったんだ。契約会の解散は、懸案事項だった。本当は（集落の）団結のためにはなくしたくないというのがあるけど、若い人への負担が大きくてかわいそうだという話になった。どこの家でも長男が地域にいなくなっていた（出て行った）しね。

契約会は3つの杉山を持っていたが、固定資産税がかかってくるからね。いまの時代、みんな山はもう要らなくなっているんだ。でも登記を替えるとなると、それだけでお金がかかる。もう放棄するかという話もあったけど、年配の方たちから反対が出て、保留になった。山のことは悩みだね。震災直後の部落会の集まりは、防波（潮）堤についてと、お祭りについてどうしていこうかっていう、春と秋の話し合いの2回だけだったな。とくに集落の行事はどうするのか、神社の扱いをどうするのかっていうのが、我々が気にしていたところでね。神社を変えたりはできないから。

■ 震災の日、海上で1晩過ごしたんだ

震災の当日は、イワシ網を受け取りに南三陸に出かけていたんだ。網を受け取って、家に帰ってきたら、地震が起きた。揺れで倒れた機材を整理して、すぐに船の沖出しをした。うちで持っていた5艘のうち、4艘を沖出しできた。白浜は、船で5、6分かけて沖合２００メートルくらいすすめば、もう水深50～60メートルほどの深いところにいけたからね。だから沖出しをしているときには、危険はそんなに感じていなかった。

でも津波の後は追波湾が渦を巻いていて、家の方に帰ろうとしても、帰れなかった。ヘドロの臭いがすごかっ

た。潮の流れも速かったよ。沖出しした4艘を一緒に、養殖のアンカーに固定してそこで一夜を過ごしたんだ。ラジオも無線もなかったから情報は何もなかった。午前0時になると、それまで速かった潮の流れがぴたりと止まったのを覚えている。朝の5時位に、停留できる場所を探して上陸することにしたんだ。運良く、すぐに奥さんと会うことができてね。（白浜）集落の家は、7〜8軒が外観を保っていたけれど、自分の家や他の家は、基礎の土台以外全部流された跡だった。白浜の人たちが逃げていた白浜荘に自分も1晩お世話になった後、北上町を離れた。津山町の横山というところに家内の親戚の家があって、空き家になっていたんだね。そこを借り上げ住宅ということで移ったんだ。そこで5年くらい過ごしたことになる。

■ 震災直後、何からスタートしていいのか分からなかった

震災直後の2ヶ月くらいは道具もないし家も作業場もない状態だったから。残ったのは船だけで、なにからスタートしていいのか分からない、これからどうするかって考えていた。当初は行政のガレキ処理の仕事をしていたんだけど、7月になって塩釜や岩手のワカメの種を仕入れて、まずはワカメを再開したんだ。その後、1800個のブロックとロープとアンカーを仕入れて、9月までに定置網用のブロックを投入して、11月には定置網も再開した。網は、和歌山県や長崎県から中古を購入してね。網さえあれば、全部やれると思ったんだね。そういう時は、行政の制度や補助よりも自分自身の裁量で購入したりしてね、復興をすすめたのさ。正直、国からの補助なんて待っていられない状況だった。あとから出てきた補助制度もたくさんあったけど、どれだけ補助が出るのかわからないからね、何をどれだけ買っていいのかもよくわからなかったんだ。震災のあった年の12月に、自宅のあった場所に共同の作業小屋（納屋）を建てた。漁業をやるには、家と作業場が何より大事だからなぁ。

■ 自分の目標は、仕事を震災前の水準に戻すことだね

国や行政も復興の予算を出すだけでなく、地元の人たちがうまく使えるようにしてほしいと思う。協業化にしても、復興させるのに1人ではできねぇから共同化だっていうのはわかるんだよ。でも、たとえば漁師が給料制で働くというのは、続けるのが難しいんじゃないかって思ったんだ。漁師は、全員が毎朝8時から定時まで働きましょう、というような時間通りにはいかないし、無理に一緒に平等に、って、足並みを揃えなくちゃいけないとなると、自分がどんなに前に進むために頑張っても、必ずしも自分のプラスにならないことだってあるだろう。協業化しても、将来的には資材、場所・漁場、分け前をどうするかが難しいんじゃないかな。個人でやるには出だしが大変だけど、私は従来どおり（個別にやるの）がいいと思ったんだ。グループでやる、といっても、ただ足並みをそろえるだけでは進歩が無いんじゃないかって。

自分の目標は、仕事を震災前の水準に戻すことだね。現時点で私の後継者はいないから、自分のできる範囲でやって、借金はつくらないようにして、やっていく。

■ 海と漁業はどうなったか

震災後に再開した定置網の位置は、震災前と変わってないよ。だけど、養殖施設の設置の規制が変更されて、それまで密集していた状態が緩和されたんだな。うちは震災直前にはワカメの養殖を１００メートルのロープで29本やっていたけど、震災後には１３０メートルのロープで35本やっている。そういうこともあってか、ワカメ・ホタテの養殖は震災直前のダメだったときよりもむしろよい状態だったんだね。海の栄養分が豊富になっていたようだ。津波で底のヘドロが巻き上がったのか、海がきれいになって、釣り船でもカレイが戻ってきてたくさん釣れるようになった。ただ福島原発事故の汚染水の（報道の）関係で、スズキやヒラメなどの魚には規制

がかかって出荷停止になってしまったけどね。

定置網の方は、イワシの獲れる量が少なくなってしまっている。カツオも回遊のコースが変わったとか、外国から来る巻き網船団に獲られてしまって、カツオ船がかなり遠くまでいかないと獲れなくなったと聞いている。

今年（２０１７年）はなんだか海の状態が、震災前のダメだったときに戻りつつあるようだって話をしているよ。ホタテの斃死が発生したり、穴空き（虫喰い）の病気のワカメが増えてきたりしてね。これからちょっとそういう状態が続くのか、って心配しているよ。

■ 白浜の集団移転に参加する

最初は44軒が集団移転に参加するってことだったけど、だんだん減っていってしまって。いったん半分くらいに減った後、結局家を建てるのは10軒ちょっとになっちまった。時間がかかって、日にちが経つにつれ、みんなの気持ちが変わっていったんじゃねぇかな。

長塩谷（集落）の数軒も、白浜の集団移転に合流することになったんだ。これからは一緒の集落（新しく「白浜長塩谷部落会」が設立された）だから、集会所ができたらいろいろな話し合いもしなきゃいけない。たとえば、白浜としては、お祭りは復活させたいし、お寺や神社は再興を考えなきゃいけない。長塩谷とは別々の集落だったときにはお祭りの時期が6月、10月とそれぞれ違ったから、そのまま「春祭り」、「秋祭り」っていうことで別々にやるのでいい、となった。日程が以前よりも前倒しになるのも構わないということにしようとね。獅子舞もやりたいなぁ。震災で集落は一度バラバラになってしまったけど、「お祭りをやるぞ」って言ったら、今でも遠くからでも来てくれるんだ。でも、その次の世代のことを考えると、だんだん白浜から遠のくんじゃないかって、心配にもなるね。

他にも敷地内の立地をどうするかとか、集会所の場所はどうするかとかね。女性たちが花壇とかの話し合いもしていたな。そういう話し合いをする時は、（集落内で）差がつかないように配慮したんだよ。「平等」がいちばん大事だから、そこはしっかり守らないといけない。他にも、移転地は風当たりが強い場所（台地）になるから、そういうことも考えるんだ。1番（大事なの）は住むところだから。家のことは、早くして欲しいとずっと思っている。震災があってから、定置網も養殖も再開したけど、家ばかりはなぁ。家だけはおじいさんとおばあさんのためにも早く進んでほしかったんだ。うちの親世代だと、これまでずっと海や浜を見て暮らしてきた人たちが、急に山を見るような暮らしになるんだから、そこが気の毒なんだよね。

■ 復興は、構想と現実をあわせて進んでほしい

復興の進み具合はなかなか遅いと感じている。行政は、本庁と支所との確認作業で時間が取られている印象だ。道路などの直轄の事業だけ進みが早かったような気がする。われわれからすると、震災から3年くらいまでがとくに遅かった。復興は、構想と現実をあわせて進んでほしいんだ。でも構想だけが先に進んでいったところがあった。ちゃんとかたちになれば、（復興事業に）手をつけてくれれば、活力になる。そうすれば気分的に違うんじゃないかってずっと思っていたんだよ。

自分の仕事は、これからもできる範囲で、自然の流れに合わせて、やれる限りやるという感じだね。定置網も養殖も、今年良かったから来年もどうにかなるだろう、というのが分からないから。4、5年ペースで考えていかねばならないし、これまでいろんなものをとって仕事をしてきたのも、リスクの分散だったり、管理だったりする面もあるからね。たとえば将来的には養殖ワカメの量を少し減らすとか。状況を見ながらずっと考えているよ。

構成／黒田暁

佐藤勝子（さとうかつこ）さん
私らはもう、磯物があれば
じゅうぶんに生きていけました



昭和12（1937）年生まれ。北上町大室集落出身。中学卒業後、石巻の親戚宅で暮らすが21歳で大室に戻り、佐藤商店に嫁ぐ。震災まで、佐藤商店は大室で唯一の商店だった。店の切り盛りに加えて、磯物とりや行商、水産加工場勤めなどに従事し、女契約（集落の女性組織）でも多くの役職を経験した。4人の息子がいる。

■ 娘時代は石巻に

生まれた家の屋号はシンヤと言って、畑もあったし、家も大きかったんです。叔母夫婦や叔父夫婦、子供たちがみんな一緒に暮らしていたの。24人家族でね、北上村の大家族って、新聞に載ったりラジオ放送もされたのよ。10人兄弟の8番目に生まれたんだけど、上がみんな男だったから、弁天さまって言われてね。大事に、大事に育てられました。石巻にいる母の従姉妹が旅館の一人娘だったんだけど、男の子を一人産んで、すぐに亡くなってしまってね。遺された子の姉として来てくれ、と言われて、中学を卒業してすぐその家に連れて行かれた

の。そのときは向こうの娘になるつもりで行ったんだけど、そのうち、私を連れて行ったおじいさんが病気になってしまってね。自分がこんなではお前の将来をみてやれないから、浜に帰れな、って泣かれたんです。私は、大丈夫よ、って答えてね、2ヶ月しか生きられないってお医者さまに言われたのを、10ヶ月生かしたのね。それでずいぶん、周りからは褒められました。お医者さまから、看護婦として最高だから自分の病院に来てくれ、とまで言われて。あれは嬉しかったわね。それでも親が迎えに来てね。以来60年間、ずっと浜にいます。生まれも佐藤だし、嫁ぎ先も佐藤なの。

■ 商店に嫁ぐ

1月4日に迎えに来られて、11日には結婚式よ。そのときは21歳。親父（夫）は商店をやっている家の息子だった。親父は海はやっていなくて、開口だけ。お菓子の職人だったからね。だから名前は呼ばれないで、お菓子屋、お菓子屋って呼ばれてね。屋号もオカシヤなの。舅もお菓子職人だったのよ。小室にも商店はあったけど、お酒を扱うのはうちだけだった。だから周りの集落からも来ていたの。お店は津波前までありました。

磯物を採るようになったのは、結婚してから。でも私は、みなさんみたいに小さい頃からやっていないから、採れないでしょう。慣れたころには楽しくなりましたけど、こうやってここで生きていかなくちゃいけないのかな、って思った時もありましたね。たまにたくさん採れたりすると、今日は誰にもらってきたんだ、って姑に嫌みを言われるの。昔は嫁姑って言ったら厳しかったですよ。人間扱いされないんだから。大変だった。

私は船酔いするの。開口のときに櫂（かい）を手伝うんですけど、本当に死ぬ思いなのよ。帰って来てから2日も3日もごはんが食べられなくて。それでも嫁だからね、行かないと。明日は開口だから海に行って助けてこい、って言われたら、はい、って答えるしかないの。漕ぎ方なんて、覚えざるを得ないでしょう。とにかく連れて行かれ

て、そこで覚えて。でもね、いい時代でした。海苔なんか採れないときは、よその人が本当にザルに入れてくれたりしてね。そういう、人に対する心遣いっていうのは、ずいぶんあったからね。

■ 海苔が採れたら一番うれしかった

磯物は海苔とマツモ。あとはフノリ。これは同じ開口だから、「磯の開口ですよ」ってなったら、それぞれ自分の好みのものを採るの。個人どりです。ヒジキの開口はまた別で、集落みんなで採りました。

磯物のなかでも、海苔が採れたら一番うれしかった。岩海苔はね、みなさんから喜ばれるしね。天然はね、香りが違うの。いくら採っても売れた。いろんな方が買いに来るし、業者さんも来たし。業者さんにはまとめて売った。値段はその時その時だけど、やっぱり海苔はいい値段がした。だから海苔でずいぶん、生活の潤いはしました。海苔なんかは、爪をつかって、つまんで採るの。爪が減るから、伸ばしておく。素手です、道具は使わない。そうすると必ず、次もまた採れるでしょう。根っこが残っているから、次の潮までには伸びる。ガリガリ（熊手のような道具）を使うと、余分についているものが全部採れちゃうの。

あまりがめつくしないで、採れるところまで採ったら、さっと移動する。いったん家に戻ってからまた海に行って洗って、それから叩いて海苔にする。海苔簀を敷いて、何十枚、何百枚ってわーっと並べると、車で浜に来た人たちが、海苔だ、海苔だ、って騒いでね。海苔は、うちの方では、大判と小判とがあるんです。小判は出来合いの簀を買ってつくる。大判の簀はこっちでつくるんです。竹を両側に置いて、それからワラね。30センチ四方より大きい、かなり大きい。だから、大判海苔って言うんです。うちの方はほとんど大判だわね。小判っていうのは、ほとんどなかった。

その家々でうんと薄い海苔もあるし、厚い海苔もあるし。ちょっとこちらの欲を抑えて厚めにすると、美味し

いって喜ばれるし、でもあんまり厚いと、今度はぼそぼそでいやだって言われるし。難しいんですよ、海苔は。でもやっぱり、いい塩梅。厚くもなし薄くもなしだと、やっぱり、食べても美味しい。うちはずいぶん買ってもらいました。今はこういう時代になっちゃってね、自分で食べるのは小判になったけど。

■ 磯場のはなし

私が採っていたのは、うちの集落のすぐ裏の「クマノマイ」というところ。あとは昔、千石船が着いたっていう「千石浜」、その隣の「横沼」、そのまた隣の「猪の浜」ね。海苔はクマノマイがいいんです。広いし、採りやすかったし、品物がよかった。海苔でもなんでも、つく場所によってモノが違うんです。クマノマイは何をとっても良かったの。なんだろうね、北上川からの水がうまい具合に混ざり合ってるのかな。

場所から場所は、一日で移動するの。モノがいいと人が集まるから、すぐなくなるでしょう、そうすると次の場所に移動する。大室の磯場は、端から端まで全部歩けるの。ほかの集落はみんな、次の磯場までは山を越えたり崖を行ったりするんだけど、ここは全部繋がってるから。歩くのは、ワラで編んだ草履を履いたの。磯場なんかとくに、海苔とか海藻がつくでしょう。だから転んじゃうの。ワラの草履は全然滑らないのね。磯物は春先だからまだ海が冷たくて、草履で行くと足が冷えるんだけど、冷たいより滑る方が怖いもん。草履は老人たちがつくっておいてくれるんです。うちではじいちゃんがね。

横沼は、大天馬島のすぐ前にあるんです。大天馬には大きな沼がある。それで、あの場所を横沼って言ったみたい。沼は青くて、絶対に水が涸れない。その沼には、天女が下りてきたという伝説があってね。そこでなにかまずいことをやると、大天馬さまが怒ってね、大きな波が来て、海が荒れて、そのまま流された人がいるって、うちのばあちゃんがそういうことを言って聞かせたの。大天馬さまのところでは悪さをするなよ、ってね。だか

ら私らは「大天馬のお沼さま」と呼んでね、磯物採りでお沼さまのところを通るときは、足を忍ばせて歩きました。

■ 嫁同士で、おやつを持って。開口は楽しい時間でした

磯物採りにはジャガイモを茹でて、それを持って行ったの。おやつですよ。おやつのことを「たばご」っていうんだけどね。たばごってね、三度の食事以外に出されるもの。間食のことね。だからジャガイモでも何でも茹でてね、ずっとあとになってお砂糖なんかを見るようになってからはお砂糖をまぶしたりして。そういう生き方をしてきました。

一緒に行く人は、2、3人はありました。本当にいい雰囲気だったのよ。磯物採りは潮の引く時間に合わせるんだけど、その1時間も2時間も前に磯場に行って、ジャガイモを食べながら姑の悪口を言うの。ストレスの発散。嫁同士、仲のいい人たちで行くの。だって仲が悪い人なら、悪口を言っていたのが姑にすぐ伝わるもん。そうやって潮が引くのを待っている時間が、最高だった。そのときによって美味しいおやつがあれば、それを持っていったりね。

危ない目にあったことは、ある。海に落ちたりね。波がさーっと来て、磯場にいる私らのとこまで来て、流すんです。そういうのはしょっちゅうあった。でもちょこっと泳ぎぐらいは出来るから。泳ぎができないと、開口に行っても危ないですよ。

磯物を採るのは、潮が引いている間だけ。一回で3、4時間くらい。採り始めたら、もう誰も話さない。競争だもん。自分で採ったものは全部自分のものでしょう。もう夢中夢中、ほんと夢中よ。時間が限られてるから。腰なんかが痛いって言って伸ばしていたら、なにやってるんだ、ってなる。そんな暇もない。自分たちの腕っていうのが分かってるからね。あまりぶすっとしてたら、半分も採れないでしょう。採るのは競争だったけど、そ

れでもやっぱり、楽しい時間だったわね。

■ 拾いコンブは女性の仕事

拾いコンブはずいぶんやりました。コンブは個人では採れなかった。婦人部しか採れないの。9月頃から、海が荒れるとコンブが次々と重なって上がってくる。だから、コンブが「土手になってる」って言ったんです。今日はコンブが土手になっているから婦人部みんな出て下さい、って知らせが回る。浜だけで干しきれないくらい量が上がると、車で畑に持っていって、土のないところに干した。そのくらい、量が多かったのね。

大室はとくにコンブがよかったの。浜もよかったし、品物もよかったのね。干して商品にしたコンブは、いくらでも買いに来た。業者さんもよく来ていました。拾いコンブを専門に買う人があったの。コンブのままで出す場合もあれば、業者に頼んで機械でとろろコンブにするときもある。いろんな形で、ずいぶん買ってもらいました。

コンブをお金にするとね、男どもが寄ってくるの。売上げを男契約にちょうだい、ってね。苦労の部分は女の人。だからね、昔から男は女にすがって生きてきたのよ。渡したお金は、男契約の運営資金になったり、なにかの購入資金になったり。水道補修や神社の境内の修理とかもあったから。まあ、酒代にもなったかもね。婦人部でも使いましたよ。移動契約（次節参照）とか、運営資金とかにね。資金は潤沢で、不自由をするということはなかったですよ。だから、男どもに渡しても、まあいいか、ってね。今はもう、そういう共同採りは廃止になりましたけどね。

■ 契約では、この時とばかりに着物を着替えた

婦人部は、以前は女契約って言ったの。女契約はお嫁さんの会のこと。婦人部って言うようになったのは、大

分あとになってからね。

女契約は、昔は人数も多かったんです。一軒から1人ずつ、大室は47戸あったから。年齢はいろいろよ。お嫁さんをもらわない家は、ずっと同じ人がいるからね。それこそ19、20の小娘から、50、60の人まで来ていましたね。お嫁さんは集落の人も多かったけど、よそから来た人たちもいましたよ。北海道とか、ずいぶんいろんなところから。私もそうだったけど、昔は結婚は親が決めたからね。お見合いなんかも、代役がやったりね。もらってもらえない女性は、少し体のいい人を代役にして、結婚式当日は全然別の女性がお嫁さんの席に座ってた、なんてこともあったのね。

契約は盛んでした。毎年、春と秋に集まって、自分たちでご馳走をつくって食べた。「テイマエ」っていう当番があって、送りテイマエと迎えテイマエと本テイマエと、その3人で仕切るんです。それで50人分の料理をつくるの。テイマエだけでは足りないから、お下回りと言って、親戚とかが必ずお手伝いに行きました。これもまた、結い（協働作業）だったのね。今は移動契約と言って、追分温泉（女川集落の温泉旅館）とかでやるようになったから、楽になりましたよ。契約のなかに上下関係ってあまりなかった。若いからって差別されたこともなかったね。昔の女契約は楽しいものだった。みんな着物を着て、お洒落をして行くんです。お嫁入りのときに着物をいっぱい持たされるけど、ふだん着る機会はないでしょう。だから契約のときは、この時とばかりに着替えるの。朝のご飯を食べるときの着物と、夜のご飯を食べるときの着物と、全部違うのよ。朝の着物は着替えて衣紋掛けに干して、夜はまた着替えて。ほら、こんなにあるんだぞ、って。楽しみでしたね、着物を着るのは。

■ 塩ウニに焼きアワビ

ウニはね、塩漬け。家でつくるの。人によって味はそれぞれ。塩加減が違うからね。ご飯の上で溶かしながら

食べると、すごく美味しい。今はほとんど全部、贈り物です。昔は売ったの。家で食べる分がないくらい売れたんです。ウニの殻は、昔は畑の肥料にしたりした。カボチャの根っこなんかにやると、いい味のカボチャが出来るの。

ここでは、ウニのことを「ガゼ」って言うの。ムラサキウニはガゼ。バフンウニはボウズガゼ。あまりトゲが長くないからね。ウニはムラサキウニがいいウニなの。バフンウニはここら辺ではおまかない（自家用）。ムラサキウニとバフンウニは、採れるところが違うのね。ムラサキウニは深いところにあるから、男の人たちが鉤を使って採るけれど、ボウズは私たちでも簡単に採れるところにある。背が立つくらいのところにね。もんぺをはいて、水中眼鏡をかけて、潜って採りましたよ。

アワビはね、海から採ってきたら殻付きのまま、浜で焼いたの。焼くとすごく香りがいいの。これはね、「磯アワビ」って言って、漁協が開口するアワビとは違う。モノは同じなんだけど、「イソト」がとるの。イソトって、磯をする人のことをそう呼ぶの。船を持って海をやる人は漁師さん。オカから行って磯のものをとる人はイソト。私もイソトです。

磯アワビは、竹をつけない小さな鉤を使って採る。本当はこれは密漁になるんだけど、漁協の人たちも目をつむっていたっていうか。ダメだよ、とは誰も言わないの。売るほどは採らないからね。海に入ると寒いから、みんな火鉢を持っていく。その火鉢でそのまま焼くのね。アワビを食べながらアワビを採るの。あの香りは本当にすごいの。浜中にアワビの匂いがしていたわね。

■ 末の子をおぶってホヤを売る

あとは、天然ホヤを採ったんです。昔はホヤは前の日に採って次の日にオカに売りに行くんだけど、うちは商

売をしていて車があったから、採ったらすぐ殻を剥いて、その日のうちに売りにいった。だから、活きのいいものばっかりでした。

わたしはよく、一番末の子をおんぶして行ったんです。それで、子供をおんぶしてくる人のホヤは活きがいいって、そういう噂が回っていた。あるとき子供を置いていったら、おらい（自分）のところは子供背負ってくる人からしか買わないんだ、って言われてね。それで、今日は子守をしてくれる人がいたから置いてきたんです、って言うと、ああそうか、ってね。買う方はね、こちらの顔までは見ないのよね。だから、おんぶした子供が目印だったの。集落を一軒一軒歩いて、「ホヤなんじょでがすっぺー」って聞いて回るの。ホヤはどうですか、っていう意味ね。一日に50袋とかつくってね、それでも活きがいいと、あっという間に売れるんです。わたしが売っていたのは、飯野川沿いの中島、皿貝、あとは皿貝のそばの馬鞍。車だったから、一番遠いところを任されたんです。バスで行く人たちは、乗り降りの楽なところを行くんです。誰が決めるって、売る人たちの間でね。お互いがかぶらないように。あんたはバスだからこっちで売りなさい、オカシヤ（かつ子さんのこと）は車だから遠いところに行きなさい、ってね。リーダーがいるわけでもないんだけどね、やっぱり、そういう話し合いがあったのね。

結局、近いところに車の人が入ってしまうと、売れるものも売れなくなるでしょう。そういうのはお互いさまね。持ちつ、持たれつ。話し合いをするのは、大室の人たちの間だけ。小室の人たちは、また別のところに行っていたんじゃないかな、自然なわばりじゃないけれど。浜は他にもあるけれど、うまく調整っていうかね、そういうのがありました。

■ 売り先ではずいぶん優遇されました

ホヤの他に、磯物もずいぶん売りに行きました。私のころはもう、お米よりほとんどお金に換えていた。それも車だから、やっぱり遠いところまで。いつも親父（夫）と一緒に行ったけど、親父は売り方も何も知らないから、私を置いて帰るのよ。だから帰りは歩きなの。歩くのは相当かかりますよ。まともに歩いたら3、4時間はかかるわね。でもね、親父が途中まで迎えに来ていたりするの。あとはね、全然知らない人でも車を止めてくれる人がいてね、二つ三つ手前の集落まで乗せてくれることもあった。

磯物なんかを売るところは、決まった人のところだからね、行くとね、こっちで言う「おふかし」、餅米をふかして味付けをしたもの、そういうのを出してくれたりね。そろそろおまえさんが来る頃だから用意しておいたよ、ってね。私は私で、その家のおばあさんに、小さなホヤなんかをお土産に持って行ったりね。そうするとね、これ美味しいんだよなあ、って言われてね。ずいぶん、優遇されました。いろんなものを食べさせてもらいましたよ。

■ 小さな者が生きていくには

津波後は、ずいぶん磯物は減った。採れなくなっちゃった。浜の様子は変わりました。海の中が変わったのかね。海苔がついていた地盤も下がってしまったとかでね。震災後は開口もほとんどなくなって、自由採りになった。前は開口のときでもヒジキは採らないでください、っていう注意があったけど、今はそれもない。だって人がいないんだもん、ここは、もう。50軒あったのが、20軒残ったらいい方じゃない？残った人たちだって、海のことを出来る人と出来ない人があるでしょう。

わたしは震災後は病気もして、だから海には行かなくなったの。一回は行ったんだけど、今は全然やる気がし

ない。もう、そういうので生きていかなくてもよくなったしね。結局、何の仕事でも、欲が入ると頑張れるの。今はまったく、欲がこれっぽっちもない。

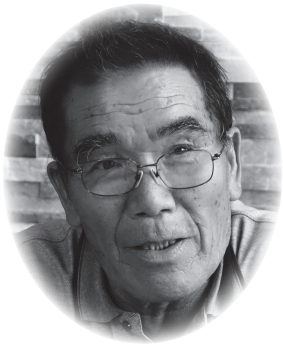
だけど、小さな者が生きていく制度は、昔のままの方がよかったのよね。私らは嫁だったし、姑には本当に使われたけど、やっぱり、働けば働き甲斐があったしね。コンブを拾ってもお金になったし、ヒジキもずいぶんよく売れたし。

私らはもう、磯物があったらじゅうぶんに生きていけたんです。磯物のほかにも、アワビやウニが季節によって開口になるでしょう。だから浜にいても、わりと暮らしは楽でした。このころの変わり方は早いわね。昔はじっくり変わっていったけど、最近は何年かでさっと変わる。昔は変えることがあったら何十年もかけて、じゃあ変えるか、ってなったけど。私らの時代と今の時代は、違いますよ。

構成／髙崎優子

千葉磐夫（ちばいわお）さん

海を眺めると、スッとする。地球上でここほど住みやすいところはないんだ



昭和16（1941）年生まれ。北上町小室集落出身。サケ定置網漁を中心に、ワカメ養殖などを長らく営み、今も現役で海に出る。震災当時は小室区長をつとめ、津波発生からわずか3日後に自主的な集団移転を目指して動き始めた。その後、小室は宮城県の防災集団移転促進事業計画認可第1号となる（2012年3月）。平成27（2015）年末に高台移転地に新居が完成し、震災を機に父親の跡を継いで専業漁師となった長男と妻との3人で暮らす。

■ 地震の後もタコの通り道は変わらない

このあいだ行っていたのは、カゴ漁さ。カゴ漁というのは、タコ。カゴの大きさはあまり大きくはないね。俺たちが使っているのは沖合の人たちが使ってるのより一回り小さい。ミズダコは通る道が決まっているんだ。その道にカゴを仕掛けておくと、必ず入る。昔からこの通り道は変わらない。地震の後も変わらないね。タコ漁

は、俺の楽しみ。こういうのは、海が好きでないとやっぱり駄目だな。海が好きな人は、今でも定置網や養殖の他の漁もやる。若いのでも、好きな子はいるよ。

ミズダコは、だいたい春だな。春はミズダコがとれる時期。3月くらいで一度いなくなって、藤の花が咲く頃にまたやってくる。この、藤の花が咲くときにとれるタコのことを、こっちでは「藤ダコ」って言うんだね。昔から、地元の人がそう呼んできた。まあ、旬なんだね。

マダコは10月が一番だな。マダコを釣るのはここで「コボロ」っていう小さい石、それが海底にあるところ。あれの大好物はコボロに棲むカニだから。釣るのは「イシャリ」という道具を使う。イシャリはね、竹の枝、これでなるべく丸みの素直な、平らな石を挟むんだ。で、二叉になった木の枝を竹に結んで、枝の先に餌をからめて、糸で縛る。竹の先には大きな、鉤みたいな針を両側につけてある。餌はね、最初はサンマを使ったりするけど、タコが釣れるとタコにする。内臓を使うんだ。タコの内臓は餌持ちがいいんだよね。鮮度が長く持つってことさ。イシャリには長い糸をつけて、遠くへ放る。で、海の中であやすんだ。海底を這わすんだよ。イシャリをあやしながら、だんだんと舟に寄せてくるわけさ。タコがイシャリを抱いたら、ずしりと動かなくなる。そうなると糸を絡めてひっぱって、タコがすっかりイシャリに乗ったかどうか、加減をみる。大丈夫だと分かったら、そこからぎゅっと糸をひっぱる。そうすると、タコごとイシャリがあがってくるわけさ。あやし方は大いに関係あるね。釣れる人と釣れない人の差はそこなんだよな。イシャリを上手にあやせば、タコをうまくだませるからね。イシャリは十三浜ではもう、使う人は何人もいないんじゃないかな。このままだと、つくれる人はいなくなってしまうね。

■ 漁師の他の仕事はしようとは思わなかった

地震の前、小室には28戸の家があった。ここは昔、天保の大飢饉で集落の人たちがほとんど死に絶えたんだね。それで、ここの先祖になる人たちが、気仙郡気仙村（現在の陸前高田市付近）というところから来たんだ。小室に空き家がある、ということで入ったらしいんだけどね。この人たちは、南部大工だったみたいだね。おらほ（自分）の本家の人たちも、気仙村から。旧家と呼ばれている家は、天保の大飢饉の前からいる人たちだと、そう言われているけどね。おらい（自分）のじいさんは、月浜から来た人なんだ。本家の長女と結婚して、小室に来た。

もともと小室で産まれた人でないから、漁業権がなくて、漁はできなかったんだね。それで、客船の免許をとったんだ。ここは相川から石巻まで、内水面航路だけどね、船はいろいろあったんだ。その免許をとって、船長をやっていた。おらいの一番最初の海の記憶は、そのじいさんに、昔の木造船でタコ釣りに連れて行かれたんだな。3つか4つの頃だろうな。俺はもちろん釣れはしないけど、男孫だから連れていったんだと思うんだけどね。

実際の漁は、親父から習ったんだ。おらいの親父は漁業権を持っていた。親父は俗に言う小漁（こりょう）っていうかさ、アワビ採りとかウニ採りとか、天然のワカメやコンブを刈る名人だった。小漁っていうんだよね、うちの方ではそういう小さい漁のことを。親父は延縄もやっていた。これは小漁とはまた違う。

親の手伝いはイヤではなかったな。当時はエンジンがないから全部櫓漕ぎでしょ、だから朝早く出るわけさ。今日はどこまで行くって親父の頭の中にあって、向こうに着いたら親父がタバコを一本吸って、それから採り出すわけさ。だから往復が大変なわけ。櫓漕ぎなんだから。船は漕ぐよ、なんぼでも。櫓漕ぎが出来なかったら、船に乗られないもん。小さいときからみんな教えてやらせるの。そうやって、子供の頃から親の仕事を手伝っていて、気がついたら自分も漁師になっていた、という感じだね。物心ついたときから海に出ているし、小さい時

からとにかく漁が好きだったしね。他の仕事をしようとは、思わなかったな。

■ 小学校を抜け出してイカ釣りに

昭和21（1946）年、22年あたりかな、十三浜ではスルメイカがダイリョウ（大漁）で。俺が小学校4年生ごろまでは随分釣れた。お盆あたりの夏釣りの小さいのから始めて、あとは暮れまで。一番は秋だね。秋イカは大きいから。場所は港を出てすぐだよ。あの頃は木造船しかないもん。

今みたいな電気もなにもないっちゃ、だから大人たちは午前中に竹藪に行って、切り流しの竹を持ってきて、「トボシ」っていうのを作ったわけ。竹の先をちょうど竹箒みたいに割いて、中に飴松を入れて、火をつける。それがトボシ。飴松は、松脂のうんとついた松のこと。あいつを山から拾ってきて、小さく割って乾燥しておくんだ。非常に燃えやすくてね、長持ちするんだ。トボシを焚いて、イカを寄せて、それで釣ったわけさ。集魚灯の代わりだね。焚き付けは杉の枯葉だ。トボシは一晩は持たないんだ。だから二本も三本も舟に積んでいったね。

餌は、一番最初は抹香鯨の歯を使ったんだ。あとは鹿の角。加工して、重りをつけて、今でいうルアーと同じだね。返しのない針を二重につけてね。あと、「トンボ」っていうんだけど、竹串を芯にして、10本くらい針を出す。これにイカの共食いっていうか、生干しのスルメの皮を巻きつけるわけ。要はスルメは光に寄るでしょう。皮を完全に干さないでおくと、夜、水に浸けると光るんだよね。

小室ではどの家も、スルメ釣りには出たわけさ。だからね、その時期になると、浜がにぎやかなんだ。俺もイカ釣りはよくやった。小学校1年生から。いやー、おもしろかったね。行きたくて行きたくて、そのために学校から早く帰ってくるんだ。相川小学校に通っていたんだけど、お昼の弁当喰うと、休み時間の間に廊下を伝って、民家の家の影を回って、学校から逃げていたんだ。そして大人たちに混じって、一緒に漁に出た。連れて行

くのは本家のおじいさん。お駄賃なんてものはないけどね、楽しみ、楽しみ。だって、大人たちに負けたくないんだもん。4年生のときかな、ひと月で800枚くらい釣ったことがあるよ。

イカ釣りに出た次の朝は、自分が釣ったスルメを学校に持っていった。だから学校は毎日午後から逃げていたけど、一回も怒られたことはないな。釣ったスルメを先生にあげるから。俺ばっかりが珍しい訳じゃないよ。他の子供もけっこう行っていたね。一緒に学校からお昼で逃げてくる連中が、ずいぶんいっぱいいたな。

■ イカで田んぼを買う

うちの親父と親父の兄弟は、ともかくこのスルメ、イカ漁でいっとき財をなしたんだ。当時はね、うちまでイサバ屋さんが買いに来た。イサバ屋って、魚売りのこと。あの頃は今のように市場までは行かないで、ここら辺で獲った魚はほとんど、イサバ屋さんを通して販売していたんだ。イサバ屋は何軒かあったけど、うちに来ていたのは長塩谷と飯野川から。自転車で、前と後ろに大きな木箱をつけてね。重労働だから男の人だよ。

イサバ屋さんに売るのは生イカで、残りは自分の家で、開いて、干して、乾燥させた。1シーズンで1万枚はつくったね。だからスルメの時期は、夜になると干したイカを熨(の)したわけ。これもどこかに出荷したようなことを聞いたな。子供だったから、詳しくは分からないんだけど。

そうしてつくった金で、大川の福地(ふくち)（現石巻市河北町）という場所に、一町一反の田んぼを買ったんだ。親父と、親父の妹の亭主と合同で。だけど当時は不便だから、あそこに田んぼ買ったって、ここからは通えない。だから小作をさせていた。そうしたら、2年間だけ小作料をもらったところで、農地法の改正があって、みんな取られたわけさ。土地は小作のものになった。兄弟みんなで一生懸命、夜も寝ないでスルメを釣って、それでつくった金で買った田んぼだったんだけどさ、たった2年でなくなってしまったわけさ。大損だね。

■ 十三浜は田んぼがない

田んぼを買う人は、ほとんどなかったね。何かで財をなさないと買えないから。うちを除くと、小室で田んぼをやっていたのは2軒しかないんだ。この人たちの田んぼは大須にあった。今みたいに機械で耕作するわけじゃないから、全部人の手だから、全部部落の人の応援さ。稲刈りも田起こしも、みんな部落の人たちの力を借りてやったわけ。

手伝った方がもらうのは、ワラ。ここは田んぼがないから、ワラがないんだ。ワラはね、いろいろ使ったんだ。綯(な)って荷物を背負うロープにしたり、海苔簀をつくったり、正月では飾り物でもなんでも、ワラはぜひとも必要だった。そしてね、磯物を採るときは、滑らないから、ワラ草履が一番安全だったんだ。どこの家でも、磯をやるために、男の人たちが暇を見てはワラ草履を作っていた。上手につくる人の藁草履は2回3回と使えるけど、下手な人がつくったものは一日も持たない。だからとにかくいっぱい作るんだ。田んぼの手伝いは、ワラを手に入れる貴重な機会だったわけさ。

磯物を一生懸命とるのはね、問題は米との物々交換だった。十三浜では田んぼがないから、女の人たちの商いで主食の米を確保するのが一番の大事なことだった。オカに行って、米に交換するんだ。海藻が米に化けたんだね。商いをする人たちのことは「背負子(しょいこ)」って言った。背負子はほとんど、お嫁さんとかお母さん連中だ。その人たちはオカヤドっていうのを設けてるわけ。決まった売り先だ。親しくなって、お互いに信頼し合うようになれば、オカヤドになるわけさ。オカヤドに行って、その家の親戚とか友達とかを集めてもらうんだ。オカヤドの人たちには、こちらから海産物を必ず土産に持って行く。オカヤドはオカヤドでこちらに気持ちを必ず返す。そういう関係だったんだね。

■ 天然ボヤは探りボヤ。「ツバガリ」を立てて、「ホヤ鉤」でとる

背負子はホヤも持っていった。初夏にはいいホヤになるから、ちょうど田植えをしている時期に重なる。こっちからホヤを持っていくと、田植えをしている人たちが、ホヤを買うよ、って声をかけるんだって。持っていくのは、剥き身にした生。ワラで串をつくってね、10個ずつつなぐんだ。それを「ひとづら」って数えたんだけど、ふたづらで米1升とか、みづらで米1升とか、そうやって物々交換していたね。

天然ボヤは、昔はものすごくあったんだ。採るのは当時は「探りボヤ」。舟で行って、鉤で採る。7尋くらいの長さの、竹の鉤だね。ホヤがついている場所は、どの人もみんな分かってる。長年の経験で、ここの海底にはこういう岩場がある、ここはホヤがたくさんついている、ここの根（海底の岩礁）にはホヤがない、そういうのをみんな、自分で、経験で覚えている。手の感触だけで地形が分かる。今みたいにガラス（水中マスク。現在はホヤの収穫は漁協が専門の潜水夫に依頼しているため、マスクを使用する）を使うわけじゃない。探りだから、あくまでも。手の加減に頼るんだ。

探りボヤには「ツバガリ」っていう竹を立てる。これが目標。根の位置を確認するためだね。竹の下にはホヤ鉤がついていて、これを海底の岩についたホヤにひっかける。朝、海に出て、海底の状況を見て、その日の仕事をするために立てるんだ。だから場所は毎日違う。一日に数カ所回るから、数カ所立てて、夕方には抜いてくる。鉤は「ホヤ鉤」、立てる目印は「ツバガリ」。ツバガリはみんなから見えるけど、やっぱり人が立てたところには行かないんだね、遠慮して。

■ 「ロクブ」のこと

米と引き替えに行商に行ったのは、だいたい、うちのお袋の世代まで。うちのお袋は人が大好きでね。道歩く

人を寄せてお茶を飲ませたり、ご馳走まで出すような人だった。日本全国を巡回する、お坊さんのような人も来ていたね。うちのじいさんの代あたりまでは、そういう人たちのことは、「ロクブ」って言ったんだ。

うちに来ていたのは夫婦だった。どちらも丸坊主さ、女性の方も。白装束で、脚絆を巻いて、白足袋、草履、杖。杖は錫杖（しゃくじょう）ではないね。一番最初に来たのは、妹がちょうど3歳くらいのときかな。秋に来たんだ。夜、相当暗くなってから来て、泊めてくれないか、ってね。それから毎年、何十年と来たね。春と秋とに来るんだけど、毎年、三日と違わないで来る。あの人たちは、一年の自分のコースが決まっているんだ。寒くなると南に行って、暖かくなると北に行って、そういう巡回だったんだろうね。

無料で泊めて、ご馳走するんだけどね。家の中で、一番いい座敷に泊めるんだ。座敷に荷物を置くと、まず拝む。神様拝んで、いろいろ拝んで、お袋が出したお膳を食べる前にまた拝む。次の日は朝一番にまた、拝むんだ。出る時には、お袋が、あの人たちの持っているお弁当箱にご飯とサツマイモの天ぷらなんかを詰めて渡してね。神棚に飾るもののこととか、いろんなことを教えてくれた。寄った先の話なんかも聞かせてくれた。だけど、自分たちのことは話さない。だから夫婦の名前も、出身地も分からないんだ。うちの親父もお袋も、おそらく何も聞いてはいないな。しゃべっている言葉からして、東京あたりの人だとは思うんだけどね。たぶん、戦争で子供を亡くして、その供養で歩いていたんじゃないかと思うんだ。

20年くらいは来ていたんだけど、あるとき、ぱったりと来なくなった。高齢だったから、夫婦のどちらかが欠けたんだろうね。あの人たちのことは、もうロクブとは呼ばなかったけど、まあ、ロクブだね。ロクブは、昔はいたの。だけど20年も同じ人が来るっていうのは、珍しかったんじゃないかな。

■ 舟競争は活気があって、にぎやかだった

以前はね、十三浜では、契約講の主催で、舟競争って大会があったんだ。時期はお盆のすぐ後くらい。出るのは青年団の年代の男の人たちだ。女の人が出たという記憶はないな。

小室から小滝までの相川学区の競争だから、7部落。これはすごい盛り上がったね。7部落の人が全部集まる。すごいんだ。真剣勝負なんだよ。各部落の人たちがみんな、太鼓を持っていって応援するわけ。相川のサクネという根がスタート地点で、今の小室の船着き場のあたりがゴール地点。沖から港に向かって、7艘横並びでいっせいに漕いでくる。あの頃だから木造船だ。舟漕ぎは各部落から選抜で。圧倒的に腕ぢからのある、漕ぎの上手な人たちさ。優勝したら、お酒がもらえた。小室には、木村正五郎さんという舟大工の名人がいてね。その方がつくった舟をね、競争用に吟味して、よく滑るやつを使ったんだ。一番軽くて、スピードが出るやつを。だから1人漕ぎでも4人漕ぎでも小室は負けたことがない。いつも小室が1着だった。俺は実際に出たことはない。まだ子供だったから。そのくらい、昔のことだ。本当に、なんていうかなあ、活気があって、にぎやかだった。子供ながらに、本当にね。俺が小学校を卒業する前にはなくなっていたな。気がついたら、もうやってなかったね。

■ アワビを採って小遣いかせぎ

舟競争には、水泳もあったんだよ。これも各部落から一人ずつ。当時は夏場の競争だからさ。水はあったかいしさ。ふだんも泳ぐよ。漁では泳がないけども、みんな泳ぎも上手だし、潜りも上手だし。

ここの潜りは素潜りだ。どこの部落も、夏場は子供達はみんな、潜りをやったね。小学生でもけっこう潜るよ。今だから言うと、昔は中学生になるとね、夏場に潜ってアワビを採ったんだ。そして小遣いかせぎをした。

漁協の口開けとは関係ないから、本当は採ってはダメなわけさ。だけどね、やっぱり、商売で買う人がけっこうあるんだ。大人が買うわけさ。その人たちも口外しない。直接子供が商売人に売るからね、お金は親には渡さない。自分の小遣いだから、いろんなことに使ったよ。あんまり深くは潜らないけどね。3、4メートルくらい。2、3人で一緒に行くんだ。アワビがある場所は分かってるから、潜る場所は決まっているわけ。磯伝いに行って潜るんだけど、夏場だから、潜れば見える、なんぼでも。あの頃は、海の中も透明で、アワビもうんとあったんだ。代々みんな、やってきたんだね。

■ 養殖ワカメで失敗して、出稼ぎが多くなる

とにかくね、ここの一年間の生活の糧は天然ワカメとアワビだった。このふたつが唯一の現金収入で、年間の生活をするにはぜひとも必要だった。この儲けはバカにならない。海苔や磯物は米と交換、ワカメとアワビは現金になる。天然ワカメは全部乾燥。天日干しで。当時はね、ワラで綯ったムシロを袋にして、それに詰めて売ったんだ。一袋にけっこう入ったね。普通の大人で担ぎ上げるのに大変なくらいだった。ドラム缶よりもちょっと大きいくらいだな。当時はみんな、漁協に出荷したんだけどね。

ワカメの養殖は、一番最初は各浜が共同で始まったんだ。これも漁協が関わっていたわけ。各浜々で、地先を漁場として養殖させた。小室は28軒全員総出で参加した。養殖も最初は全部乾燥。塩蔵は途中からだね。共同はうまくいかなかった。やるにはやったけど、その割に収穫がなかったんだね。だって、人数が多すぎてさ。施設本数も少ないし、水揚げ高がないから。途中からやめていって、最終的に4、5軒しか残らなかった。共同でやって、失敗して、それで出稼ぎが多くなったんだ。失敗で借金はしなかったけど、養殖ワカメをやるよりも、外へ出て働いた方がいい、となって。小室では、出稼ぎにはほとんど全員出たね。

出稼ぎはね、3月から行って、お盆の13日には帰ってくるんだ。というのも、ここではお盆過ぎにブリ漁があったのさ。一本釣り、引き釣りだね。当時の雇用保険ていうのは、1ヶ月に12日働けば権利がつくわけさ。だから8月12日の午前中まで働いて、午後に浜に向かう。それで、お盆がすぎるとすぐにブリ漁が始まったんだ。10月いっぱい、11月近くまでは続いたね。ブリ漁をやっていたときはね、沖に仲買の船が来ていたのさ。今は値段が安くてどうにもならないけど、当時はけっこういい値段で買ってもらえたんだよ。

■ 出稼ぎはおもしろかった。2回、夜逃げをしたこともある

おらいも出稼ぎに行ったよ。東京、富山、横浜、山梨、静岡。基本的には土木関係の工事。毎年行っていた、毎年違うところに。最初のうちは、まだ結婚もしていない。未成年の頃だね。仕事がつらいこともあったし、いろいろなことがあったけど、出稼ぎ歩いたときは、まず、おもしろかったな。若かったからだろうな。

友達と行って、2回夜逃げしたこともある。1回目は箱根の十国峠。夜、みんなが寝た後に、2人でこそっと起きて、熱海の梅園を目指して歩き出したのさ。途中で運良く知り合いのトラックが乗せてくれてね。熱海駅で下ろされて。その時でね、熱海はああいう観光地だけどね、駅には浮浪児がうんといた。伊勢湾台風のあとだから、昭和30年代だな。俺たちはいささかの給料もらってたから、お金持ってたから、心配で眠れないっちゃ。ごろごろいるんだもん、浮浪児が。

朝になって、一番列車で東京まで戻ろうとしたんだ。でも、なんでかわからないけど、東京に着く前に横浜で下りたんだ。横浜で下りて、二子玉川で下車して、ぶらぶらしていたら、地元の土建屋のおやじさんに声をかけられたわけさ。うちに来ないか、って。どこに行くあてもないから、お世話になります、って言って、二人でついていったんだ。東京農大の講堂の解体工事だったな。親方は俺らを見て、どこかから逃げてきたって、ちゃん

と読めたのさ。大きなバッグを持ってぶらぶらしていたからね。あの頃はそのくらい、働き手を探していたんだな。

■ 延縄は「ヤマハカリ」で

ここでは、延縄もやったんだよな。34、5年くらい前までかな。冬場もやったし、夏場もやったね。延縄はみんなはやらない。大指で2軒、小滝で2軒か3軒、小指が1軒だったかな。相川が2軒、小泊が2軒、小室でも2軒、大室でも1軒か。うちの親父は、本家と、本家から出た従兄弟と3人で、専門にやっていた。俺も何回も船に乗ったよ。延縄ではね、いろいろだな。よく釣ったのは、ここではハムって言うんだけど、ハモ。ハモにドンコにクロゾイにネウ、メバル。餌はね、一番使ったのはサンマだよな。サンマはイサバ屋さんで買ってくるんだ。獲った魚はイサバ屋さんで買ってくれるから。一番高く売れたのはこれといってないんじゃないかな。だいたいみんな同じくらい。

釣れなくなってきたんではなくて、そのあとに網に切り替えたんだな。ここは冬によくタラが獲れたんだ。スケソウダラ、マダラね、刺し網。いっせいに変わったわけではないけどね。延縄は、ここで事故もあったしね。船が流されて、遭難して。そういうことが2回ほどあったから。あとは昔だから、今みたいにGPSがあるわけじゃないし、レーダーがあるわけじゃないし、磁石だけ持っての仕事だからね。昔の人はヤマハカリ（一般にヤマアテとして知られる、陸上の地形などを利用した伝統的な漁師の漁場認識法）ってのをかけるわけさ。南山と北山をかけて、あとは地元の山をかけて、自分がどこにいるかっていうのをはかるんだ。うちの方でかける南山はほとんど牡鹿半島の山、北山は志津川湾の島や気仙沼、大島だ。そのヤマハカリによって、魚の種類が違うわけさ。ハモがいる場所、ドンコがいる場所、それがみんな、ヤマハカリで決まっている。本当にこれだけは、それこそGPSと同じで間違えないんだ。こういうのは何回も、何十回も海を歩くと、自然と覚えていく。今も分かる

よ、ヤマハカリで。息子たちの世代では、ヤマハカリが分かっている人は少ないな。

■ サケの定置網漁を始めて30年に

サケの定置を始めたのはね、今年（２０１６年）で30年かな。30年間、場所はずっと同じ。定置網は、俺は子供のころからやりたかった。中学を卒業して、志津川の今野漁網という会社に入ったんだけど、この会社が十三浜でイワシ網の定置をやったわけさ。元々は網屋さんなんだけど、カツオの餌の商売もやっていたから、自分でも餌をとろうとしたわけ。おらいは月給５０００円の約束で雇われて、焼き玉船のエンジンを担当した。ところがね、漁が思わしくなかったんだね、潮が速くてさ。それで結局、給料は一回ももらえなかった。でもその経験があって、いつか自分で定置をやりたいって、ずっとそう思っていたんだ。

本当はもっと早くに始めたかったんだけど、うちの親父が反対したんだ。親父は若い時、牡鹿半島でね、黒マグロの大謀網（大型定置網漁）の副大謀をやっていたんだ。大謀は責任者のことだ。それで、その親父が言うには、定置は北浜では成功するけれども、南浜では成功しないよ、と。で、俺は1回止められたわけさ。牡鹿は北浜だけど、ここは南浜だからね。

反対されたのは、20代半ばあたりじゃないかな。今考えてみると、うちの親父がなぜ反対したかってことも分かるんだ。というのは、今みたいにサケ漁がなかったわけさ。当時の定置はイワシが中心だった。浮き魚（イワシやマグロ、サバ、アジなど、海面近くを大群をなして回遊する魚）は何でも同じだけど、北向きの浜は早めに日がかげる、そうすると日がかげった場所に魚が淀む、集まるわけさ。だから定置は北浜じゃないと成功しないって、そう言われていたわけ。今みたいにサケが獲れるんなら、親父も賛成したかもしれないけどさ。当時はサケはほとんど孵化をやっていない。もっと前、本当に天然遡上したものだけだった頃は、サケは希少な魚だったんだ。

というのもね、昔、四国から来た人で、白浜と小室の境のカマノハマという場所で、定置をやっていた人があるんだ。納屋を立派に建てて、住居も設けて。大正の終わりか、昭和の初期だな。それが十三浜で一番最初の定置だった。そしてね、小室の人が2、3人、頼まれてそこで働いていたんだ。その手伝った人たちが言うのには、一年に2本か3本しか、サケが入らなかったんだって。だからサケが1本入るとね、みんなして喜んで酒盛りをしたらしいね。俺はその四国の人に会ったことはないけどさ、浜に下りると、今も建物の跡があるよ、ぽつんとね。

■ 定置網はおもしろくて、絶対にやめられない

北上水系では、サケの孵化場は、飯野川から岩手の盛岡までの間に7カ所あるんだ。俺が定置を始めた頃は、放流も大分増えていてね。秋サケ漁が本格的に出始めていた。このときはもう、親父は反対しなかった。俺も一人前になっていたしね。

金があるわけじゃないから、全部借金で始まった。一大決心だね。一回で何千万の借金だからさ。当時は補助金とかはなかった。定置をやるために、新しく船も造ったし、網も作ったし、必死でやった。網は今野漁網で一式つくってもらったんだけど、一番最初の払いは漁協から自分の金を起こして払った。あとは借金というか、つけ払い。中学生の頃の俺を雇った親父さんがまだ生きていて、儲けたらでいいからな、無理して残金払う必要ないからな、って言ってくれて。ありがたかったね。全額返したのは、かなり時間がかかったな。10年とか、もっとかな。なんていうかな、ともかく、一発当てようとしたんだな。自分が好きで始めたからさ、時期になって、網を入れたら、夜中の1時2時に目が覚めるんだよ。早く明るくならないかな、と思ってさ。早く見に行きたい、楽しみなんだ。寝るのは遅いんだよ、寝てから2、3時間で目が覚めるんだ。漁師なんて、だいたいそういうもんだ。定置はさ、一杯飲んで寝ているわけにはいかないよ。仮に、今朝の網起こしでサケが１００本入っ

た、と。そうしたら、明日は何本入るか、それが頭にあるからさ、寝ていられないんだ、わくわくして。まあ、夢だね、夢を追うんだけどね。漁はいろいろやったけどね、この定置は本当になんていうかな、おもしろいというか、夢というか。これは絶対、やめられねえな。

■ 地震から3日後、移転を目指して動き出す

地震の3日後から動いたんだ、この高台のことで。最初はおらいの本家の大槻（おおつき）家の畑と、その隣の佐々木家の畑を造成しようと思って動いたわけさ。本家の大槻士夫（ふみお）とは、同じ避難先にいたんだ。そこですぐ、話し合いになった。早くに動いたのは、なんにもなくなったからさ。雨宿りする場所もない。だからまずは住める場所、雨宿りする場所をつくろう、ってなったんだ。もう、下（元の家があった場所）に戻るつもりはなかった。自分たちで測量をして、費用も計算して、そこまでで1ヶ月。その頃は市からの話なんて、何もなかった。防集（防災集団移転促進事業）なんて分かんないもん、全然。最初はその2人の土地で、6軒の家が建つ予定だった。それが集落みんなで集まってやろうとなったのは、集団移転の話が出て、市の担当が入ってから。2人の土地だと、今の高台の土地全部にはならない。約半分だ。あとは地権者の人たちがみんな協力してくれて。ここ（地権者の同意）が一番大事なんだよな。そういう人たちの協力があって、だから順調に進んだわけさ。

だけど途中で事業が進まなくなってしまったんだな。市の方がね。実際に造成が始まるまで、認可から1年半かかってしまった。その間に3軒、最初の予定からは抜けてしまったな。結局、高台移転に参加したのは14軒。被災していない人たち、修繕した人たちが6軒。その20軒が小室になる。震災前から10軒くらいは減るということだね。本当は、おらいとすれば、出来るだけ地元に残って欲しかったんだね。それもあったから、移転は早く、早くと思ったんだけどね。いかなるところだって、時間が経てばね。生活もあるし、ここにいようと思って

も、自然と気持ちも変わってくるもの。1年でも、半年でも早く工事が進めば、残る人も出るわけさ。

■ にっこりはコミュニティだった。でもやっぱり、自分の生まれたところがいい

この家が建ったのは、平成27（2015）年の暮れだね。暮らしは落ち着いてはきたね。もう、どっしり落ち着いた。ここに戻るまで、にっこり（仮設にっこりサンパーク団地）から毎日小室の港に通ったけど、帰り道も全然遠いっていう感覚はなかった。仮設といえども我が家だからね、住んでいる間はさ。でも、今ここにさ、落ち着いて、にっこりに行こうとするとさ、ちょっと遠いなって感じがするよね。もう、住んでいないからだろうね。

にっこりには4年8ヶ月いたからさ、懐かしいね。なんていうかな、いい思い出というか。ふり返ってみると、にっこりはよかったね。集会所があって、おばあさんたちが毎日のように集まって、いろんな話をして、お茶を飲んで。これがよかったね。前は違うところに生活していたけど、にっこりで一緒になって。今はよく話題になっているけど、コミュニティだね、うん、コミュニティ。やっぱり、大事なんだな。にっこりもコミュニティだった。

にっこりもよかったけどね、ここに帰って来たら、なんていうのかな、安心したっていうか。うーん、気持ちが楽になったね。やっぱり、自分の生まれたところがいいんだよな。1000年に1度の津波にあったけど、ここは住みやすいところなんだよ。地球上でここほど、住みやすいところはないんだ。にっこりにいた頃も、雨が降って仕事が出来ない日でも、一日に1回か2回は必ず、小室の海を見に来ていたんだ。海を眺めると、スッとする。一度大きく暴れて、大きく災害を起こしてくれたんだけど、しかし我々人間、海で大きく育てられてきたんだもん。生活してきたんだもん、何百年。今さら海を嫌いと言うわけにはね、いかないよ。

構成／髙崎優子

あとがき

この小冊子は、私たち北上川河口地域研究グループが刊行する、4冊目の聞き書き集になります。グループのメンバーが初めて北上を訪れたのは、２００４年のことです。きっかけは、美しい水面が広がる北上川の河川敷に生育するヨシ原でした。ヨシ原と地域のみなさまとの深い関わりにすっかり魅せられたメンバーは、以来、1年に2度ほどのペースで訪れながら、みなさまから色々なお話を聞き、学び、調べてきました。そうするうちに、ヨシに限らず、さまざまな自然と巧みに関わる北上川河口地域の暮らしそのものに、深い関心を抱くようになりました。そして、伺った貴重な話を記録したい、暮らしの記憶を残したい、と考えるようになり、２００７年、1冊目の聞き書き集、「北上川河口地域の人と暮らし――宮城県石巻市北上町に生きる」を刊行しました。

やがて、私たちの関心は、北上川の流れに沿うように、川から谷地へ、田んぼや畑へ、さらに海へと広がっていきました。２００８年ごろからは、十三浜のみなさまにお世話になるようになり、海の利用と暮らしについて、幾度もお話を伺わせていただきました。みなさまのお話は尽きることなく、また、メンバーの興味も尽きることなく、ふくれ上がった調査ノートには、みなさまの暮らしの知恵や工夫、苦労や楽しみが、ぎっしりと書き込まれていきました。

２０１１年3月の東日本大震災発生後、私たちはいったんそのような調査をとりやめ、微力ながらも、今、出来ることから関わらせていただこうと、高台移転ワークショップのお手伝いや、震災被害に関する聞き取り調査を始めました。グループのメンバーには、この時から北上に通い始めた者もいます。わたしも、その一人です。復興のお手伝いをさせていただいているうちに、私たちが気がついたことがありました。あの日以来、大地が

掘り起こされ、杭が打たれ、コンクリートの建造物が次々に出来て、目に見える風景はまるで、そこにあったはずのもの一切を塗り替えてしまうかのような勢いで変わっていきます。けれども、みなさまの記憶の中に宿る、北上での生き生きとした日々の暮らしの光景は、けっして容易に消え去ることなく、今を支え、これからを考える手がかりとなっていたのです。

記憶は未来への指針となる。そう考えた私たちは、ふたたび、聞き書き集の作成に取り組み始めました。そうして２０１４年、みなさまの多大なご協力のもとに、「女性編」と「農業編」を相次いで刊行しました。しかし、私たちの力不足で、またしばらくの間があいてしまいました。

それから3年、この「漁業編」で、ヨシ原から始まった私たちの旅は、ようやく海に辿り着くことができました。海の話をお聞かせ下さったみなさまのうち、千葉治彦（はるひこ）さん、西條武さん、佐々木昭一さんには、２０１６年に刊行した『震災と地域再生――石巻市北上町に生きるひとびと』（法政大学出版局）の聞き書きにご登場いただきました。この「漁業編」の冊子には、遠藤栄吾さん、佐藤清吾さん、阿部滋さん、佐藤喜美夫さん、佐藤勝子さん、千葉磐夫さんにご登場いただいています。ご登場いただいたみなさまには、幾度の訪問、そのたびの浜のごちそう（私たちの多くは大変な食いしん坊です）、心より感謝申し上げる次第です。なお、語り手の一人、遠藤栄吾さんは冊子作成中の２０１７年5月にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

ここにまとめることが出来たのは、海のお話の、ほんの一部にすぎません。字数の制限で、泣く泣く切ったお話もあります。また、ご登場いただいていないみなさまからも、本当にたくさんのお話を伺っています。お名前を挙げることは控えさせていただきますが、海岸を怪しげにうろつく私たちを、いつも親切に迎えてくださり、惜しみなくお話をお聞かせ下さる、浜のすべてのみなさまに、深く感謝申し上げます。また、私たちと浜のみなさまの多くを引き合わせてくれたのは、以前、この地で活躍した復興応援隊（元・パルシック）の日方里砂さんで

す。浜の復興に尽力した日方さんにも、心よりの敬意を表したいと思います。

この冊子は、北上川河口地域研究グループのうち、次の4名が中心に作成しました（肩書きは現在のものです）。

黒田暁（長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科　准教授）
髙﨑優子（北海道大学大学院文学研究科　博士後期課程）
平川全機（北海道大学大学院農学研究院　札幌サテライト研究員）
宮内泰介（北海道大学大学院文学研究科　教授）

作成にあたっては、これまでと同様、分担してそれぞれのパートを作成し、相互に添削し合い、さらにそれをご本人やご家族のみなさまに確認していただきました。もちろん、最終的な責任は私たちの側にあります。この冊子が地域のみなさまにわずかでもお役に立つことができたなら、これに勝るよろこびはありません。

髙﨑優子

編集／黒田 暁・平川 全機・髙﨑 優子
文・構成／黒田 暁・髙﨑 優子・平川 全機・宮内 泰介
写真／髙﨑 優子・宮内 泰介
装丁・本文デザイン・DTP ／平川 全機

【聞き書き】北上川河口地域の人と暮らし 4　宮城県石巻市北上町の浜のいとなみ

発行日　2017 年 12 月 20 日
編　者　北上川河口地域研究グループ
発行者　北上川河口地域研究グループ

〒 852-8521　長崎県長崎市文教町 1-14　長崎大学環境科学部黒田暁研究室
〒 060-0810　北海道札幌市北区北 10 条西 7 丁目　北海道大学大学院文学研究科宮内泰介研究室

なお、この冊子作成にあたっては、科学研究費助成事業若手研究（B）「震災復興における地域コミュニティの回復力形成に関する社会学的研究」（代表者・黒田暁）および三井物産環境基金研究助成「災害後のコミュニティ再編と自然資源管理の再構築に関する研究」（研究代表者・宮内泰介）、科学研究費助成事業基盤研究 A「不確実性と多元的価値の中での順応的な環境ガバナンスのあり方についての社会学的研究」（研究代表者・宮内泰介）の助成を受けています。